
鈴の音

中さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鈴の音

【Zコード】

N1414X

【作者名】

中也ん

【あらすじ】

靈力のある双子の春美かずみと春恵かずえが新たな地で悪霊退治……親類びいろか村中を巻き込む死闘が始まる。

喜びアリ哀しみアリの物語。

引っ越ししてきた双子

「よいしょっ、よいしょっ」

「大丈夫？ 春美ちゃん。」

「大丈夫だよ、春恵ちゃん。」

双子の姉妹は大きな荷物を持って、新しい家に向かっていた。

春恵「もうつ、何でこんなに遠いの！？」

春美「もうちょっとだから…」

橋を渡つたところで、同じ年位の男の子が話しかけてきた。

「あんたらが春美と春恵？」

『？』

2人は首を傾けた。

すると男の子は2人の返事を聞かずに、2人の荷物を持って行つた。

春恵「ちょっ！」

春美「春恵ちゃん、どうやら彼はお世話になる宇宙さんの家族の方の様よ。」

春恵「え！？」

春美「ついていきましょう。」

春恵「え～！」

春美は嫌がる春恵を引きずつて行つた。

長い山の道を歩いて行くと、大きな歴史ありげな家が見えてきた。

春恵「すげえー、デカつ！」

春美（ここ、見覚えがある…？）

「何してるんの？早く中に入れば？」

男の子はすぐに中に入つて行つた。

宇宙家

「いらっしゃい、よくきたねえ。」

家の奥から2人の祖母、松子まつこが出てきた。

『おばあちゃん!』

2人はこの家に来るのは初めてだが、松子とは小さい時からよく会つていた。

松子「2人とも疲れただろう? 冷たいお茶を用意してくるよ。」

春恵「やつたあー」

2人は家にあがつた。

松子「2人の荷物は部屋に置かせたよ。部屋は、この廊下を真つ直ぐ行つたところの階段の前の部屋だよ。」

2人は松子にリビングに案内された。リビングは一階にあり、途中に部屋の場所も聞いた。

リビングに入るとそこには、さつきの男の子ともうひとり男の子と女の人気がいた。

松子「2人の叔母の乙葉おとはと、もうひとりの叔母の紅葉ひやの子供達、涼介りょうすけと光輝ひかりだよ。」

乙葉「この子達が私の姪の春美ちゃんと春恵ちゃん? セツスガ双子、そつくりね。」

『…。』

乙葉「私は乙葉、よろしくね。」

涼介「僕は涼介だよ。いとこ同士仲良くなつてね。」

『は、はいっ。』

光輝「…。」

光輝は何も言わずにリビングから出でていった。

春恵「さつきの…。」

涼介「あの子が光輝。」

乙葉「こうちゃんは、少し照れ屋なのよつ。」

涼介「あんまり気にしないでね。」

『うん…。』

2人はうなずいた。

松子「乙葉、紅葉や吉ちゃん達を知らないかい？」

乙葉「さあ。買い物にでも行つてるんじゃない？」

松子「そうかい…。じゃあ、紅葉達は昼食の時に紹介するとしようか。2人はそれまで部屋でゆっくりしていろといいよ。」

『はい。』

2人が返事をすると、松子も部屋から出ていった。

一昼食時

2人は涼介に案内されて、別館の一階のダイニングルームに行つた。そこには、乙葉と光輝以外に6人いたので、2人とも緊張した。

乙葉「奥から順に、2人の叔母兼私の姉の紅葉。次に母さん…おばあちゃんの妹の孫家族の道子さんと拓也さんと、2人の子供の拓真くんよ。」

春恵（ひ孫！？）

乙葉「こっちが、道子さんのいとこの吉長くんと加帆ちゃんよ。」

春恵（ホントに大家族だよ！）

乙葉「おばあちゃんは、別で妹の梅子さんと梅子さんの夫の吉男さんの3人で食べてるのよ。」

春美「すごい大家族ですね。」

乙葉「そうね。」

春美「ご迷惑をかけないよう、頑張りますー春美と春恵ですつよろしくお願ひします。」

春美はお辞儀をすると、続いて春恵もお辞儀をした。

加保「やだ、そんな固くならないで！－仲良くしましょ？」

加保の言葉に、2人の緊張はとけた。

祠（ほこら）

昼食中、加帆が積極的に話しかけてくれて、食卓はにぎわった。

加帆「あ、そうだ！」

ごはん食べ終わつたらみんなで、村の散歩に行こうよ！」

涼介「そうだね。この村には古い神社とか遺跡（？）みたいな建造物が多いから、楽しんでもらえると思うよ。」

春美「おもしろそう！」

春恵「うん。」

加帆「決まりねつ！」

各自準備したら、玄関に集合ね！」

『はいっ！』

2人は元気よく返事した。

昼食を終えるてしばらくすると、乙葉・涼介・吉長・加帆・道子・拓真の6人と春美と春恵の2人が玄関に集まつた。

加帆「じゃあ、出発！」

8人は元気よく家を出た。

まず8人は山道を登り、土地神を祀る神社に参拝した。

涼介「ここの中腹の祠は、この村が豊作に恵まれるように見守つているんだよ。」

春美「春恵ちゃん、お世話になる土地神様なんだから、ちゃんとあいさつしなくちゃね。」

春恵「だね。」

2人は手を合わせた。

涼介「…？」

その2人の姿に、涼介は何かを感じた。

参拝を終えると、つぎは山の中腹の祠ほこらに行つた。

涼介「この村には、古い祠が4つ東西南北にあり、昔この山にいた
悪霊を封じていると、伝わっている。」

加帆「そうじゃなくても、ここら辺は道がややこしいから、迷つた
ら大変なの。だから2人だけで祠には行かないでね。」

『…はい』

加帆「ここの大祠は”北の首”（きたのしゅ）と言うのよ。”南の首
”（みなみのしゅ）はあっちの方向にある大樹の根元にあるの。”
東の首”（ひがしのしゅ）はむこうのバス停のところに、そして”西
の首”（にしのしゅ）はこっちの小学校の校庭にあるわ。」

春恵「そういうえば、バス降りたら祠っぽいものあつたね。」

春美「うん。」

加帆「それが東の首よ。」

『へえ』。

すると乙葉は話に飽きたのか、突然話に入ってきた。

乙葉「…祠の説明は終わるとして、みんな、暑くない？」

そう言って乙葉は8人を無理矢理村のはずれにある唯一のスーパー
につれて行った。

壊された封印

スーパーに行つた8人は、乙葉のおじりでアイスを買って食べた。

乙葉「んーっ……」

春恵「うんうんうん……」

拓真「お母さん、もつともつと…」

まだ3歳の拓真は、母道子と2人で一つのアイスを食べていた。

道子「だめよ、お腹壊しちゃこまasyよ。」

拓真「もつともつと…」

拓真のおねだりは続いた。

乙葉「たくちゃん欲しがつてるんだから、わつとあげればいいのに…。」

道子「乙葉つてばあ…。」

涼介「乙葉さん、拓真を甘やかすから、またおばあちゃんに怒られますよ。」

乙葉「別にいいじゃない。おいしいんだから…。」

涼介は乙葉の甥っ子なのに、乙葉のお兄さんみたいだつた。

春美「ねえ、春恵ちゃん。さつきの祠だけど、どう思ひ?」

春美がこいつそり聞いてきた。

春恵「どうつて…?」

春美「悪靈を封印つて…。」

春恵「ああ…。私は何か嫌な感じがした。」

春美「やつぱり?春恵ちゃんも思つたんだ。」

春恵「春美ちゃんも!…?」

春美「何か…」

そこに涼介が話に入つてきた。

涼介「やつぱり2人は感じるんだね。」

『…?』

ドツ!

その時、一瞬大きな揺れが起こった。

T₁, T₂, T₃, T₄, T₅

まるで地面の底から込み上げてくるかのように、揺れが大きくなつた。

四
何！？

スーパーの中は大きな揺れで、陳列だなが倒れたり、屋根がはがれ落ちたりして、めちゃくちゃになつていつた。

道子 みんな、こいは危険よー

ガラスに注意して外に！！

道子の指示で、8人は外に出た。するとわいせきまでいたところに屋根がはがれ落ちてきた。

加帆「間一髮」。

春美「！？」

春美はひとり、山の方を見た。

春恵 - 春美ちゃん どこへ行ったの? 上

春恵の言葉で
みんなは春美を見て

- 1 -

た。 て」と「の」の補助ある邊にから 云々は眞直くどうか何でい

加帆 「みんな、あつちも……。」

加帆がみたのは、他の祠の方

加帆がみたのは、他の祠の方から天空に真っ直ぐと伸びる光だった。

ゾクツ

۷

その時、春美と春恵だけでなく、涼介・加帆・乙葉・吉長・道子も、背筋が凍りつくような何かを感じた。春美（これは……邪氣！）

春憲 - 春美ちゃん?」

春恵は、黒子でいる春美を心配した。

「あ、おばあちゃん達がまだ家に！」

吉長「先に戻つてゐぞ！」

吉長が一番に走りだし、誰よりも早くに家に戻つていった。

加帆「待つて！」

加帆も吉長を追つた。

道子「涼介くん、私たちも家に…」

涼介「うん、2人もついて！」

春恵「はいっ！」

道子は拓真を抱いて、走り出すと涼介と春恵も走り出した。

春美（春恵ちゃん！）

春恵（？）

春美は春恵を心で呼び止めた。

春美（私達は、あっちへ行くわよ！）

春恵（うん…？）

春美と春恵は別の方に向に走つて行つた。

涼介「！？」

それに涼介は気がつき、道子を先に行かせ、2人を追つた。

春恵「どこに行くの！？」

春美「祠のところ！」

春恵「何でっ？」

春美「行けばわかるよっ！」

2人は山道も休まずに走つた。

春恵（！）

春恵は止まつた。

春美「春美ちゃん待つて！」

春美（？）

春美は振り返つた。

春恵「何か聞こえない？」

春美（…。）

2人は耳を澄ませた。

ガガガガガ...

涼介「2人ともこつちに来て！」

涼介が2人に追い付いた。

『涼介くん！？』

涼介「この音は土砂が崩れる音だ！」

『！？』

2人は涼介のいる場所に走った。

ドゴオー

移動した直後、土砂が木々と崩れて行つた。

『！？』

土砂の中に、さつきまでいた北の首の祠が流れていつた。

涼介「祠が！？」

これは、祠の封印が解けたことを示していた。

呪われし村

”たま……をたた！”
祠が2人の目の前を崩れ落ちると、春美は声を聞いた。

春美「何？」

春恵「春美ちゃん？」

”助けま……を助け……！”

春美「つ……！」

声は大きくなり、春美は頭痛に襲われた。

春恵「春美ちゃん！！」

涼介「……」

春美は立つていられなくなり、気を失った。

春恵「春美ちゃん、春美ちゃん！？」

春美は春美の体を左右に揺さぶつたが、春美は田を覚まさなかつた。

一ひとつ、

伝説の雪女が甦るー

氣絶した春美の頭にその言葉が響いた。

春美「ん……？」

春美は部屋で目を覚ました。

春恵「よかつた…田が覚めて。」

春美「あれ…？部屋…か。」

春美の隣には、春恵がいた。

春恵「あの後、氣絶した春美ちゃんを涼介くんが運んでくれたの。」

春美「…………。」

春恵「みんなはダイニングに集まってるよ。」

春美「ああ…。」

春美は軽く返事をした。

春恵「…？」

春美（一ひとつ、伝説の雪女が甦る一つて…何だったの？）

春美の頭の中は、その声の事で一杯だった。

春美と春恵は、とりあえずダイニングに行つた。

春美「クシュッ…」

春美はくしゃみをした。

春恵「大丈夫？ 夏風邪？」

春美「何だか寒い気がする。」

春恵「…確かに。」

ダイニングに行くと、乙葉・涼介・光輝・松子・道子・拓也・拓真・

吉長・加帆がいた。

春恵「あれ？ 梅子おばあちゃんと吉男おじいちゃんと紅葉叔母さんは…？」

乙葉「吉男さんがさつきの地震で腰をいわして、病院に行つたの。梅子おばあちゃんと紅葉叔母さんは、付き添いよ。」

乙葉は2人を見た。

涼介「何事もなればいいんだけどね…。」

春美「…そうですね。」

あの…祠の封印って、どうなつたんですか？」

涼介「壊されてしまつたよ。」

春美「これから、大変な事になるでしょうね。」

春恵「春美ちゃん、何か感じる？」

春美「うん。村中から異様な気配を感じるわ。」

春恵「やつぱり…。」

涼介は2人を見た。

涼介「君たち2人は靈力の持ち主なんだね。」

『はい。』

乙葉は2人を見た。

乙葉「2人とも！？」

『はい。』

涼介「祠の封印をしたのは宇宙家だ。だから宇宙家にはよく靈力を持つ者が生まれる。

僕や乙葉さん、吉長くんとか…。

代々宇宙家には、封印を守る当主がいて…。」

乙葉「それが涼介くんってわけ。」

『！？』

涼介「…あのね、封印の話はまだ続きがあるんだ。
封印したのは悪靈だけじゃないんだ。」

突然涼介の雰囲気が変わった。

涼介「悪靈の他に、雪女・鬼・河童・天狗も封印してるんだ。
それぞれが村で悪さをしてたのを、先代が封印したんだ。」

春恵「そんなモノが…。」

春美「そんな…。」

その時だった。

吉長「みんな大変だ！！外を見ろ！！！」

吉長が窓の外を見て叫んだ。

始まり

全員は吉長の叫びで外を見た。外は一面雪景色になつていた。

春恵「今は真夏なのに…。」

加帆「どうして雪が降つてゐるの…？」

ゾクツ

春美は寒気がした。

春美「一ひとつ、伝説の雪女が甦るー」

春美はあの言葉を口にした。

涼介「春美ちゃん、今…何？」

春美「夢に出てきた言葉です。」

涼介「…。」

春恵「あ、女人人がいる！」

春恵は川の方を指差した。

加帆「何？」

…誰もいないじゃん。」

春恵「いるよ！」

加帆「何も見えないわよ。」

春恵「え…？」

「あれは雪女。だから靈力のない者には見えないのよ。」

『！？』

突然部屋の中心から声がしたので、春美と春恵と涼介と乙葉と吉長は、振り返った。その声は、春美が夢で聞いたものだった。そこには幼い女の子がいた。

「もちろん、靈力のない者には私も見えてないの。」

春美「あなたは誰？」

「私は桜子。みんなにお願いがあつて来たの。」

春美「お願い？」

すると加帆が春美に気づいた。

加帆「えつ…何と話してるの！？」

春美「ここに女の子が…。」

加帆「やめてよ、気持ち悪いっ！！

何なのよ…女の子？雪？

これも靈力があるから？嫌つ！！」

吉長「落ち着け、加帆。」

吉長は加帆をなだめた。

桜子「まずひとつ、あなたの力を貸して…？」

桜子は手を出した。

春美「私の…？いいわよ。」

春美は桜子の小さな手に、自分の手を重ねた。

一フワツ

春美の手から桜子の手を通して、靈力が流れた。

桜子「ん…んー…つ…あ！！」

桜子の体は春美の力で満たされた。

加帆「えつ…！？」

光輝「女の子が…現れた？」

松子「…。」

春美の靈力があり、靈力のない者にも女の子が見えるようになった。

松子「あ…。」

桜子は松子を見た。

桜子「久しぶり、松子。」

松子「さ、桜子…。」

すると、涼介が思い出した。

涼介「思い出した！？」

桜子… 宇宙桜子といえば、宇宙家最強の靈能力者。

そして、松子おばあちゃんの妹。」

『えつ…!』

2人は驚いた。

桜子「そんなに驚かないで。生きていれば、あなたたちと同じ、靈力の持ち主なんだから。」

桜子は笑った。

松子「何で桜子が今…。」

桜子「私はね、今までずっと伝えたかったの。

でも、私を存在させるほどの力を持った者はなかなか現れなかつた。でも、今日は春美ちゃんのおかげでみんなに姿を見てもらうことができたわ。ありがとう。」

春美「い、いえ…。」

涼介「伝えたかった事って？」

桜子はみんなを見た。

桜子「みんな、早くこの村から出ていきなさい。これからは、この村が地獄とかすから。」

春恵「どーゆー事？」

桜子「封印よ。4つのうち一つの封印が解けた。あと3つの封印が解かれるのも時間の問題なの。

だから、完全に封印が解かれる前に、みんなにはこの村から出いでつて欲しい。」

涼介「そんな…封印が解かれるなんて…。」

桜子「封印がされてから早200年。いくら封印した者がすごい靈力者であつても、人間に代わりない。限界位すぐ来る。」

全ての封印が解かれてからじや遅いのよつ…！」

桜子は叫んだ。

涼介「…わかつた、この村に残つた人間を外にだそう。」

春恵「外つて…？」

その時だつた。

—フツ…

雪女がこの家にいる靈力者に気付き、中に現れた。

雪女

雪女「人間…見つけた。」

春美「雪、女…。」

部屋内の空気が凍えた。

加帆「えつ、今度は何！？」

松子「一体…？」

靈力のない者には、その姿は見えなかつたが、何かそこにいるのはわかつた。

桜子は靈力のない者たちを守るよつて、前に立つた。

一ピト…

雪女は涼介の手を触つた。

涼介「冷たつ…！」

雪女「…温かい。」

春美「あなたは誰？雪女さんだよね？」

雪女「そう、私は雪女。200年ぶりに起きちゃつた。」

春美「私は春美。ねえ…今は夏だから、まだ出てきちゃダメよ。」

雪女「やだよ。私、人間の言うことなんて聞かないんだからつ…。」

春美「えつ…どうして？」

雪女「私、人間嫌いだもんつ。」

春恵「は？」

春恵は少し強ばつた言い方をした。

雪女「…。」

雪女は春恵をにらんだ。

春美「春恵ちゃんつ！」

春美は春恵の袖を引っ張り、黙らせた。

春美「…どうして人間が嫌いなの？」

雪女「人間は勝手過ぎるつ

私たち雪女や雪男たちは、山で静かに雪を降らせて暮らしてただけなのに、人間は何もしない私たちを”ただ存在が怖い”というだけで封印した。

その際に、お母さんやお父さんやお姉ちゃん、お兄ちゃん…他の仲間たちは、みんな人間に抵抗して殺された。」「

『…そんな。』

雪女「封印されてから200年、山を、自然を破壊してるのは人間じゃないか！」

私にとっちゃ、人間の方が怖いね。」

涼介「…。」

涼介は初めて知った雪女の怨みを聞いて、何も言えなかつた。

春美「…だから、

仕返しするの？人間に…。」

雪女「そうよ！みんなの仇を私が討つてやるんだからっ…。」

春美「な…。」

雪女「人間は全員凍え殺す！」

雪女の冷たく青く氷のような瞳が雪女の恐ろしさを醸し出していた。

雪女「…でも、春美だけは助けてやってもいい。」

雪女「…でも。」

すると、雪女の瞳は優しくなり、春美を見た。

雪女「…でも、春美だけは助けてやつてもいい。」

春美「…なぜ？」

雪女「あなたは特別だからね。」

春美「…？みんなは助けてくれないの？」

春美は聞いた。

雪女「助けないに決まってるでしょ！助けて何の得があるの？」

春美（私には得がある…？）

雪女「それ以前に、雪女が人間を助ける事なんてない。」

春美「でも春美ちゃんだけは助けるんだ。」

」

雪女「まあね。」

雪女は勝ち誇ったように、腰に手を当てた。

春恵「言つてる意味わかんないしーー！」

すると雪女は、みんなから身を引いた。

雪女「お前たち、よく聞けーー！」

こんな村、私が1日でぶつ壊すー覚悟しなーー！」

そう言つと、雪女は吹雪と共に消えた。

脱出

乙葉「何、今の…。」

春恵「まるで、今から戦いが始まるみたい。」

春美「みたいじやない。始まるのよ。」

加帆「えつ何！？何が起こったの？」

松子「説明しておくれ。」

拓也「さっぱりわからん。」

靈力のある者は戸惑い、靈力のない者は状況がわからず慌てた。

道子「一体何があつたの？」

すると、春美は頭の整理ができたのか、何もわからない人たちに、状況を説明した。

春美「今さつき、雪女から宣戦布告を言い渡された。

村を潰す」と。

加帆「え！！」

道子「…。」

拓也「何！？」

松子「本当にかい？」

桜子「うん。」

松子「…。」

松子「…。」

全員は、当主である涼介の判断を待つた。

涼介「…、さつきに言ったように、この村に残った人たちを外へ逃がそう！！」

春恵「外へ…。」

涼介「でも、誰かがここに残らなければならぬ。」

『何で？』

涼介「まず、誰かが村を見渡せる所に残り、敵の雪女の動きを見張らなければならない。」

春美「そうね、雪女が襲ってくるかもしれない…。」

涼介「そういうこと。

次に、今邪氣が村から出ないよう張られている結界に穴をあけて、
その穴を維持する者が残らなければならぬ。」

春恵「2人…。」

乙葉「じゃあ、どちらも靈力が必要なわけね。
すると、春美は手を挙げた。

春美「私が残るわ！」春恵「春美ちゃん…、なら私も。」

涼介「だめだ！！宇宙家以外の人間を巻き込むわけにはいかない。」

春美「何を心配してるの？
もう十分巻き込まれてる。」

涼介「でも、危険だ！」

春美「大丈夫です。私、そんなに弱くない。」

涼介「でも…。」

すると乙葉が入ってきた。

乙葉「私が春美ちゃんの代わりに残るわ！」

涼介「乙葉さん！？」

乙葉「私が見張りをやる。」

涼介は結界を維持して。

吉長くんはみんなの移動を！」

春美「でもっ！」

乙葉「涼介が言うように、宇宙家以外の人間を巻き込むわけにはい
かない。2人はみんなと一緒に村を出て！」

春美「…わかりました。」

春恵（春美ちゃん？）

あの諦めの悪い春美がすぐに承諾したのを、春恵は不思議に思った。

涼介「よしつ、そうと決まれば早速行動に移そつ！」

乙葉「ええ。」

桜子「私も手伝うわ！」

涼介「ありがとうございます。」

こうして、宇宙家の脱出計画は幕を開けた。

まず、涼介と吉長が村に残つてゐる人たちを秘かに公民館に集めた。

そして、乙葉が予定地である屋上へ上ると、計画を実行に移した。

涼介「よしつ、行きましょう！」

涼介の合図で60人ちかくの村人は、静かに移動を始めた。

乙葉「こちら乙葉。雪女、現在山の学校裏に潜伏中。」

吉長「了解！」

見張りの乙葉とは、無線で連絡を取り合つた。

春恵「無線とか、かつこいい！」

春恵は目を輝かせた。

春美「もう、春恵ちゃんてば……。」

春美は苦笑いした。

村人たちは、涼介と吉長を先頭に、結界の一一番遠いところにむかつていた。

その途中だった。

加帆「……つ何これ！？」

「キヤー…………！」

村の大樹の側を通つた時、村人たちは、雪女に無惨にも殺された村の仲間たちの骸を見たのだった。

体はハつ裂きに斬られ、首がとんでもいた。

気がつけば、そこら辺りは一面、積もつていた真つ白い雪が赤く染まっていた。

女に限らず男も叫ぶほどだった。

春美「ヤバいつ！みんな、走つて……！」

涼介「え！？」

春美「雪女が来る！」

すると乙葉からも連絡があつた。

乙葉「大変よ！雪女がさつきの悲鳴を聞いて、そっちに行つたわ。急いで……！」

それを聞いた涼介は大きな声で村人に命令した。

涼介「走れー！！！」

涼介と吉長だけでなく、春美と春恵も みんなを走らせた。
みんなは一斉に全力疾走で橋を渡り、スーパーの側を通り、バス停
のところで止まつた。

涼介「はあっ！！」

涼介は全力で結界に穴を開けた。

吉長「早く出て！」

吉長は春美・春恵と共に、村人を外に出した。

涼介「くつ…。」

途中、穴が小さくなつた。

春恵「え！？」

春美「涼介くんが限界なのよ！」

春恵「そんな…村人はまだ沢山いるのに！」

開ける穴がそんなにでかくないので、いっきに通れるのは2人だけだつた。

だから、後ろには行列ができていた。

桜子「雪女が来たぞ！！！」

振り向ける者だけが振り返つた。

雪女「逃さない！」

ヒュ〜

雪女が吹雪を発生させ、霰が村人を襲つた。

春美「だめー！」

春美は持つてゐる靈力で、独自に結界を作つた。

カキーン、キーン…

結界は霰を跳ね返し、吹雪から村人を守つた。

雪女「何つ！？」

春美「させないっ！」

春美も意地になつた。

涼介「くあつ…」

穴はどんどん小さくなつていつた。

春恵「手伝うわ！」

春恵は靈力を手に集め、小さくなる結界の端をもち、広げていつた。

涼介「春恵ちゃん！？」

春恵「いいから黙つて集中！」

涼介「…うん。」

穴は元の大きさに戻つた。

そして、残つたのは涼介・春美・春恵・吉長・乙葉・光輝だけになつた。

吉長「次は春美ちゃんと春恵ちゃんが…。」

春恵「だめっ、今手を離したら…穴が…っ。」

春美「私も…雪女を止めてないといつ！」

涼介「次は光輝と吉長が出て！」

春美ちゃんと春恵ちゃんは次に…。」

光輝「…でもつ！」

その時だつた。

雪女「もう怒つた!!!!」

雪女が本気を出してきた。

春美「キヤ！」

雪女の吹雪が激しくなり、春美の結界を突き破つた。

そして、春恵にむかつた。

春美「春恵ちゃん！！」

涼介「危ない！」

涼介は結界から手を離して、春恵を押し倒した。

2人のいたところに大きな氷柱が刺さっていた。

春恵「つ…！」

春美「春恵ちゃん、涼介くん！」

春美は2人に駆け寄った。

涼介「…。」

2人は無事だつたが、春美に怒りが立ち込めた。

春美「私の妹を傷つける奴は、誰であろうと許さない…！」

春美は近づいてきていた雪女の腕を握った。

雪女「なつ！」

春美「消えて…つ。消えろ…！」

春美の怒りは力へと変わり、雪女の手を浄化した。

雪女「イヤーッ…！」

春美「消えろ…！」

雪女「ギャー…！」

雪女の手の皮膚が剥がれ、肉が朽ち、骨が溶けていった。
そしてそれは体全体に広がった。

雪女「つ…こんなことで終わらせない…めちゃくちゃにしてやる
つ…！」

雪女は最後の力で呪いをかけた。

春美「！？」

気がついたら、雪女は氷になっていた。その氷はあつという間に溶けて消えていった。

つかの間の休息

春美「つ…、ハアハアハアハア。」

涼介「フーフー…。」

春恵「つ…。」

3人とも、結界に穴を作れるほど力は残ってなかつた。

光輝「涼介！」

光輝は涼介に駆け寄つた。

涼介「バカヤロウ！－何で残つたんだ！－」

光輝「ほつとけないだろう！」

吉長「まあまあ…。」

結局、涼介・乙葉以外に春美と春恵・光輝・吉長も残つてしまつた。吉長「とにかく、今現在に結界に穴を開けるほどの靈力を持つている人はいらないんだ。」

一度家にもどつて休もう。」

涼介「だが…。」

春美「吉長くんの意見に賛成するわ。雪女は滅したけど、村に積もつた雪が溶けるには当分かかりそうよ。」

靈力の回復を待つには、あまりに寒すぎると想つた。

春恵「うん、思う。」

すると涼介は立つて『いるのが限界なのか、ふらついた。そして、家に戻ることにしぶしぶ賛成したのだつた。』

家に戻ると、乙葉ももどつていて、吉長や光輝はともかく、春美と春恵がいることに驚いた。

乙葉「なんだ、結局残っちゃつたのね。」

春美「仕方ない状況だから…。」

乙葉「ま、いいわ。とりあえず、靈力を回復しなくちゃね。夕食を作るから、待つてて。」

そう言つと、乙葉は台所へと行つた。

光輝「俺は、乙葉を手伝つてくる。」

光輝も台所へと行つた。

涼介「僕は部屋で休むよ。

2人も吉長くんも、休んでね。」

春美「はい、わかりました。」

吉長「何時に起きるとか言つてくれると、起^レじてく^レぜ?」

涼介「ありがとう。でも今はいいや…。」

涼介は軽く断り、自分の部屋に行つた。

吉長「そうか。ゆっくり休め。」

吉長は涼介の頭をポンッとなでた。

ードクン

春美「!?

また春美の頭に声が響いた。

一ふたつ、

散つた怨念が集うー

春美「つ…！」

春美に頭の痛みが襲つた。

春美「春美ちゃん！！」

春美「だ、大丈夫。」

春恵「…とりあえず、春美ちゃんも部屋で休んで?」

春美「や、私は…。」

すると、春恵は今までよつきついていた。

春恵「ダメ！寝てな…！」

春美「…わかつたよ。」

春美は怒られた子供のように、シユンとして部屋へ行つた。

心配な春恵は後ろからついていった。

吉長「ほんと、仲間良しだあな」

吉長は笑った。

春美は部屋に入ると、疲れがいつきにでてきたのか、春恵のことも忘れて眠ってしまった。

夢の中で、桜子が出てきた。

桜子「ひとまずお疲れ様。

松子を逃がしてくれてありがとう。」

春美「いえ。

桜子さんこそ……、雪女を浄化した時に、力を貸してくれましたよね？」

桜子「気づいてたの？」

春美「はい。私はあの時、本気を出さないよう、ギリギリの力で対応してたので、浄化したときは驚きました。」

桜子「……そうでしょうね。」

桜子は目を細めた。

桜子「涼介の回復には、2日は必要よ。それまでは、あなたの体も休めなさい。

春美「わかっています。それより、ひとつだけ聞きたいことがあるんです。」

桜子「私の答えれる範囲なり。」

春美「さつき雪女は何か力を使ったみたいなんです。何に使ったかわかりますか？」

桜子「ああ。」

「一ドン！」

夢の外から大きな音がした。

春美「何……？」

春美「ほんと、仲間良しだあな」

桜子「雪女の仕掛けたものだ。」

春美「何が起ころうとしてるの？」

「スウ…

すると、桜子の身体は薄くなってきた。

春美「桜子！？」

桜子「…ふたつめの祠、南の首が壊された。封印されていた者が、また甦る。」

春美「え！？」

桜子「気をつけて…。」

桜子は消えてしまった。

そして、春美は夢から覚めた。

その幽霊、茨(いばら)

夢から覚めた春美がまず感じたのが、雪女よりも強烈な邪氣だった。

春美「…あ、南の首が壊されたから。」

春美は急いでリビングに行つた。

リビングに行くと、靈力が比較的弱い乙葉・春恵・吉長は、しゃがみこんでいた。

そして、靈力が全くない光輝は氣絶していた。

涼介は無事な様で、光輝をソファーに寝かせた。

春美「涼介くん…、これは?」

涼介「さっき南の首が壊されて出てきた邪気が、みんなにはきついんだろう。」

僕も、立っているのが精一杯なんだ。春美ちゃんはどう?」

春美「私は…。」

「スウ…

その時春美の中に、何かが入ってきた。

春美「つ…。」

涼介「…?」

どうしたの、春美ちゃん?」

春美「私は…茨。」

涼介「!?」

春美の様子がおかしかった。

涼介「…春美ちゃん?」

春美「私は、茨よ。」

涼介「…憑依か。」

春美「そうよ。」

私の声を代弁できる人を探してたら、この子が一番しつくつきたか

ら。体、借りちゃった。」

春美の中に入つた子が笑うと、春美も笑つた。

涼介「…何が目的なのかな、茨。」

春美「ふふつ、お願ひよ。

私の願いを叶えて欲しいの。」

涼介「願い？」

春美はうなづいた。

春美「川辺の近くにある小学校。」

涼介「桜ヶ丘小学校！？」

春美「そう。そこに、あなたとこの子の2人が来ることが、お願ひ

よ。」

涼介「…そこに行つて、どうしろと？」

春美「行けばわかる。」

涼介「…何？」

春美「じゃあ、頼むわね！」

春美は目を閉じた。

ースウ：

春美から茨が抜けた。

涼介「…茨？」

春美「…え？ 茨？？」

涼介「春美ちゃん！」

春美「何？」

元の春美に戻つていた。

春美「今…私…何が？」

涼介は、今あつた事を春美に説明した。

春美「…じゃあ、その茨ちゃんは桜ヶ丘小学校に来てつて言つたの
ね。」

涼介「うん」

春美「で、涼介くんはどうするの？」

涼介「ん……。」

春美「私は行く！」

涼介「……危険かもしれないんだよ？」

春美「封印に関係あるかもしれないし……気になる。」

涼介「……。」

涼介は考えた。そして……

涼介「わかった。僕も行こう。」

春美「……ありがとう。」

涼介は行く事を決めた。

小さな鈴

春美と涼介の2人は、倒れている春恵・光輝・吉長・乙葉を家に残して、桜ヶ丘小学校に向かつた。

小学校の前に行くと、中から異様な数の邪気が溢れ出ていた。

涼介「つ…」

さすがに涼介も苦しさを感じてきたようだ。

春美「涼介くん…」

しかし春美は特に影響を受けていないようだった。

春美「…涼介くんは、ここにいて。中には私だけが入るわ！」

涼介「なつ…！？」

春美「強い邪氣で、立つてるのが精一杯なんでしょう？」

涼介「だが…！」

春美「いいから、ここに残つて…！私は一人で大丈夫だから。」

春美は涼介を軽く押した。

すると涼介は立っているのがままならしく、バランスがとりにくくなつていた。

涼介「う…わかったよ。」

涼介は、承諾した。

春美「ん。じゃ。」

春美は小学校の中に入った。

中に入つてすぐの玄関ホールには、人を襲うこともできない弱い靈が集まっていた。

彼らはただ春美が奥に進んで行くのを見ているだけだった。

ガサゴソ…

春美は首から下げていたお守りの中から、小さな鈴を取り出した。

春美（今日もお世話になります。）春美はこれまでの靈を成仏する

とき、いつもではないが、その鈴に頼つていた。

リイン…

美しい鈴の音がする。

春美は鈴を大事に持つて奥へと進んだ。

開戦

学校の廊下の窓は、段ボールがガムテープでベタベタに張られていて、光が遮られて薄暗くなっていた。

教室の窓も同じようになっていた。

春美は、邪気を一番強く感じるところへ向かった。

そこは、多目的室とかかれてあった。

春美「ここ…。」

「ガラガラ…

春美はドアを開けた。

すると、中には沢山の幽霊が集まり、音楽をながしてパーティーの様なことをしていた。

春美「！」

春美は、パーティーに夢中な幽霊たちをすり抜け、奥で集まる邪気の元へ行つた。

「おや、生きている人間じゃないですか…。」

春美は奥の幽霊に気づかれた。

奥の幽霊が話すと、みなダンスや食べることを止めて、春美を見た

「ここが、どういう場所かわかっているのか？」

春美「わかっていますよ。」

春美は答えた。

「わかっているのなら、ここに来るべきでなかつたな。

来てしまつたら、我々はあなたを排除するしかない。」

春美「勘違いしてない？」

排除するのは私！

されるのはあなたたちよ…！」

「なんと、これまた氣の強い女がきたもんだ。」

「そんな事、できると思っているのか？」

腕に自信のある幽霊が前に出た。

春美「できるわよ！」

春美は顔を上げたまま腰を低めた。

「簡単にはさせませんよ。」

1人の幽霊がまた一步出て、炎を操り春美に攻撃を先にしかけた。

一ボオウ！

春美「おもしろい。」

炎は春美の周りを回り、春美の死角を狙つた。

春美「おっと…。」

春美はクルッと体を回転してよけた。

「逃げても無駄だ！！」

一ボオウッ！ボオウッ！

複数の炎が春美の足元に現れ、春美の両足をつかんだ。

春美「熱つ！！」

春美はその場で足を上げたり跳ねたりしたが、炎は消えなかつた。

春美「つたく…」

春美は靈力を体から放出した。

一ホワアツ！

その靈力は炎を消し去つた。

「ほおう…なかなかの靈力。」

春美に休憩の時間外は与えられず、すぐに次の攻撃がきた。

一ゴオオオオ！！

炎の威力が強くなつた。

「さあ、次は消すことができるかな?」

炎を操る幽靈は笑つた。

激戦

春美の目の前に、大きな炎の塊が現れた。

春美「消し去るツ！」

春美は靈力を高めた。

そして、動こうとした時。

一ギュツ！

春美「つあ！？」

春美は動いた瞬間に首に細いロープ状の様なものが巻かれたので、自分の勢いで自分を苦しめる結果になった。

一ギュ…

ロープを使う幽霊は、春美の首を締め付けた。

春美「つ…」

春美は抵抗した。

「終わりだ。」

春美「！」

春美は手に靈力を集め、指先の一点に集中した。

一ブイイイイイン

靈力は実体化し、細長い刃が現れた。

刃は粒子サイズが細かく振動しているので、ロープを切り裂くことができた。

春美「ゲホツ…ゲホツ…

ゴホツ…ゴホツ…

春美は地面に転がり落ちた。

ー シュツ！

息を整える春美の頭のすぐ近くに地面に、ナイフが突き刺さった。

春美「！？」

春美は上を見ると、数本のナイフが春美にむかって落ちてきていた。春美はすぐに寝返りをうち、その勢いで、立ち上がった。

ー シュツ、 シュツ、 シュツ、

ナイフは春美が転がっていたところに突き刺さった。

「よく、 よけれましたね。」

春美「ハア、 ハア、 ハア、 ハア…。」

「でも、 もうよけれませんよ。」

その幽靈はナイフをどこからか出し、両手に持つた。そして、器用に回し始めた。

春美「つ…。」

春美はナイフだけでなく、全ての幽靈に注意しながら動いた。

春美が幽靈に近づくと、幽靈はナイフを刺そうとしてきた。

ー シュツー シュツ！

春美は大きな動きはせず、必要最小限によけた。

「ちょこまかと…」

ー すうっ

春美「！？」

ナイフの反対側からロープが飛んできた。

それを春美は左によけた。

すると、よけた方向には炎を持って待ち構えていた幽霊がいた。

春美（誘導された！？

この幽霊たち、知恵がきく…）

春美「ハアアアアアア…！」

春美は高めた靈力を放出した。

一ボオ、ボオオオオ…！」

しかし、一瞬炎が弱まつただけで炎は燃え続けた。

春美「消せない！？…イヤアアア…！」

炎は春美を燃やした。

激戦（2）

炎に包まれた春美の体は、既に熱さを感じる」ともできなかつた。汗すら出ず、皮膚は焼け焦げ、血が蒸発していつた。

春美「…」

もう、話す力さえなかつた。

春美（私…ここで、死ぬの？。
…い、嫌だ…。死にたくない。）

そう思つた時だつた。

「ガタン！」

部屋のドアが開いた。

涼介「春美ちゃん！」

涼介が、春美の靈力の異変に気づき、中に入つてきていた。

春美（り…涼介…くん？）

涼介は、春美を助けようと、幽靈に立ち向かつた。

涼介「よくもつ！！

宇宙家秘伝、滅殺術！」

涼介は、中指を下唇につけて、小さな声で素早く術を唱えた。

「何！？うわあ～！！！！！」

1人の幽靈が悲鳴をあげて、白い煙を上らせながら、消えた。涼介の術が効いているようだ。

「こいつも靈能力者か！？」

「やつちまえ！」

幽靈たちは涼介を囮んだ。

春美「りょ…すけ…くん！」

春美は手を伸ばした。

「お前は今すぐ死ね！」

炎を操る幽霊は、炎の威力を上げてきた。

春美（た、助け…ないと…）

春美は鈴を取り出した。

ーリイン…

涼介（鈴の音？）

春美（鈴よ…、私の願いを…叶えて！
私と涼介くんを…助けて…！…）

ーリイン！

すると春美の周りに強力な結界が現れて、炎から春美を守った。
そして、涼介には靈力の補充が与えられた。

涼介「！？」

涼介は靈力が急に戻つたので、驚いた。
春美は結界で身を守られるだけでなく、炎で焼け焦げた体中の皮膚
を癒された。

春美「つ…涼介くん！」

ーパーン！！

春美は涼介を囲む幽霊を消し去つた。

春美「鈴よ、私に力を…！」

ーチリーン…リーン…リー…ン

鈴が、幽霊たちの頭の中で響いた。

「…う…うわあ～…」

幽霊たちは頭を抑えて、嘆き苦しんだ。

「グアアアアアアアアアア！」

頭が割れるように痛い！！

一痛い痛い痛い！！」

リーン・チリーン・リーン

鈴が鳴り止むことはなかつた。

春美 - 消え去れ！！

春美的一言で、幽霊が女が一斉に泣き龍へていった。

卷之三

涼介「：春美ちゃん。」

広い教室に、一人だけが立っていた。

春美 - 杖中の邪氣が消えた！

これでみんな田を覚まされ

卷之三

新編 金瓶梅 卷之二

春美「大丈夫」。

涼介「……でも、靈力が減つて。

春美「私は鈴から靈力の供給があ

いの
「

涼介 - : そら

春美 さあ 家は帰る

涼介は、うなづいた。

茨の願い

2人が家に戻ると、春恵・吉長・乙葉・光輝の4人は目覚めていた。

春美「春恵ちゃん！」

春恵「春美ちゃん！」

春美と春恵は無事を喜んだ。

乙葉「何か、村中に広がつてた気持ち悪いものがなくなつてる。」

乙葉は、春美と涼介を見た。

乙葉「2人がやつてくれたの？」

涼介「まあ、ほとんど春美ちゃんが…ですけど。」

乙葉「すごい…すごいわ！」

すると、春恵は春美をもう一度見た。

春恵「もしかして、あの鈴に力を？」

春美「うん。」

春恵「…そう。」

春恵はつぶやいた。

ースウツ：

春美「！？」

春美の中に、また何かが入つた。

一フラ…

春美は気を失い、春恵にもたれ掛かつた。

春恵「春美ちゃん？…春美ちゃん！春美ちゃん！」

春恵は春美を揺すつたが、春美は目を覚まさなかつた。

涼介「春美ちゃん！」

乙葉「春美ちゃんをソファーに…。」

乙葉の指示で、春恵は春美をソファーに寝かした。

そして医師免許を意外にも持っていた乙葉が、春美を診察した。

乙葉「…………。

大丈夫よ。脈は通常、呼吸もしてゐる。あえて言つなら、前より靈力が弱まつてゐる。

だから、これは靈力の休息なかもしれないわ。」

涼介「休んでいれば、いいんですね？」

乙葉「そうよ。」

春恵「よ、よかつた……。」

「一グウ……キュルルル～

安心すると、春恵のお腹が鳴つた。

春恵「うおつ！」

春恵はお腹を抑えた。

乙葉「ふふ、遅くなつたけど、夕食にしましちゃうね。」

乙葉はキツチンに、冷めた料理を温め直しに行つた。

もう、朝だつた。

その頃、春美は春美の中に入った幽霊、茨と二人だけで話していた。

春美「あなたが茨ちゃんね。」

初めてまして、春美です。」

茨「初めてまして。

村を救つてくれてありがとう。」

春美「いいえ。」

茨「……あなたになら、この先も村を任せることができそうね。」

茨は小さな声でつぶやいた。

春美「……？」

茨は春美の手を握つた。

茨「私はこの村で生まれて、この村で死んだ。

ここでの記憶は10年とわずかだつたけど、この村は、私の大切な場所なの！」

春美「…。」

茨「だから…だから、これからもこの村を守つて！…」
茨の強い願いだ。

春美「…うん。守るよ…私もこの村が好きだからね。」

春美は微笑んだ。

茨「ありがと…。」

すると、茨の体は透けていった。

茨の未練は断たれ、成仏していったのだ。

春美「…約束は必ず守る！

まずは、封印をし直さなくちゃ。」

春美は祠の封印を決意した。

封印の方法

茨が成仏していった後に、桜子が現れた。

春美「…桜子。」

桜子「さすが、春美ちゃんね。

坦々と封印してたモノを消していくんだもん。ひょっとしたら、宇宙家最強なんじゃない？

私も最強だと言わってきたのに、春美ちゃんは私以上でビックリしたわ。そろそろ、”最強”も襲名時期なのかもね。」

桜子は笑つた。

春美「気楽ね。私は死にかけたのに…。」

春美は少し怒つている様だつた。

桜子「でも助かっただわ。鈴のお陰でねつ！」

春美「何で…鈴のこと、知つてるの？」

桜子「…覚えていないの？」

春美「何のこと？」

春美は頭を傾けた。

桜子「…そう、覚えてないのね。」

桜子はつぶやいた。

春美は聞き取れなかつた。

春美「？」

春美が聞き返しても、桜子は答えなかつた。

春美「…まあ、いいわ。」

春美は口をどがらせた。

だが何かを思いつき、桜子を見た。

春美「ねえ桜子、聞きたいことがあるんだけど…。」

桜子「何を？」

春美「宇宙家最強と言われた桜子なら、祠の封印の仕方、わかるでしょ？私に教えて欲しい。」

桜子「…祠の封印をし直す気？」

春美「うん。これからも封印が壊れていけば、封印されていた者全てを滅しなければならなくなるでしょ？……できれば、私は人間じゃなくとも、その命を奪うことはしたくないの。」

桜子「ふう～ん、いいわよ。」

桜子は案外簡単に返事を出した。

桜子「あ、でも…。私は封印の力を使ったことがないの。だから、覚えてる方法が曖昧なんだ。」

封印の方法は、家の倉の中にあるから、自分の目で見て覚えて？」

春美「はい。」

桜子「確かに、巻物だつたはずよ。」

「…封印、頑張つてね。」

桜子は手を振つて消えていった。

春美は目が覚めると、すぐに倉を探した。
そして、中庭に大きな倉を見つけた。

春美「でか…。」

春美は倉を見上げながら、扉についている古い錠に触りつとした。

光輝「何してんの？」

その時、たまたま渡り廊下を通つていた光輝が春美に気づき、近づいた。

春美「…えつと…。」

光輝「中の物に興味あんの？」

でも、無駄だ。その錠は、鍵穴が銷びてて鍵が入らないんだ。
もう40年も開いてないらしいぜ。」

春美「…そなんだ。」

春美は倉を見た。

春美「ねえ、開けれないって事は、もし中に入れたらみんなの不便が1つなくなるのよね？」

光輝「…だろうな。中には高い値打ちの掘り出し物がけっこーある

つて言つて……て、もしかして開けれるのか?」

春美「うん。みんなには何の問題もないよね?」

光輝「あ、ああ……。」

すると、春美は両手で錠を握り、靈力を籠めた。

一ガチャ：

錠は鈍い音を出し、引き抜くことができた。

光輝「スゲエ……。」

春美「こーゆーのは、少し力入れるだけでいいんだって。」

光輝「へえ……、誰か言ったのか?」

春美「昔にね……。」

春美「あれ?誰から聞いたつけ??」

春美は思い出せなかつた。

一ギイイイイイイ

春美は重い扉を押し開けた。

宇宙葉嗣（そらのはづく）

春美と光輝の2人は倉の中にゆっくりと入った。

そして春美は巻物を探しに奥に進んだ。

また光輝の方は中の色んな物に興味をひかれ、扉近くの物を、物色した。

春美は奥に行くと、巻物がなん本もある棚を見つけた。

春美「こんなに…。」

春美はすぐ手の届くところにあつた巻物を手にして、中を見た。

「スルル…

春美「これは家系図だわっ！？」

代は、おばあちゃんたちで止まってる。」

春美は家系図に、赤で囲まれている名前を見つけた。

春美「やまとのはづく宇宙葉嗣？」

光輝「葉嗣は、封印をした先代らしいよ。」

光輝が横から顔を出した。

春美「この人が…。」

光輝「宇宙家最強と言われた桜子と同等の力を持つていたらしいよ。」

春美「…そんな強い人が封印したのに、解けてしまってるのね。」

光輝「ああ…。」

そう言って、光輝は別の場所を物色しだした。

春美は巻物を戻し、別の巻物を手に取つたが、量が多く全てに目を通す気になれなかつた。

なので春美は巻物のタイトルを一つずつ見ていった。

”薬草のすすめ” ”妖怪図鑑” ”妖怪の滅し方” ”靈力の操作” 等
々の巻物があつた。

春美「ん？」

春美は”靈力の操作”の巻物を見た。

そこには、力を籠めて鍵を開ける方法が書かれていた。

春美「あ、さつき使つた方法だ。」

春美はその続きを見た。

そこには、靈力の奪い方や与え方が書かれていた。

春美「これで桜子は私から力を吸いとつたんだ…ん？」

靈力の籠め方？」

春美は続きを見た。

春美「物に靈力を籠めることが可能…。ふうん、こんなのもできる
んだ。」

春美は巻物をもどした。

「コト…

巻物の棚とは違う場所から物音がした。

春美「？」

音がした方に行くと、”秘伝書”と書かれた紙が貼つてある木箱を見つけた。

春美「秘伝書？」

春美はその木箱を、箱の置いてある棚から持ち出した。

春美はふたを開け、中の巻物を見た。

”封印方法”と、書かれていた。

春美「これだわ！？」

春美は巻物を広げた。

そこには、封印するための順序が書かれていた。

”其の一：封印する器を用意するべし”

春美「器…。祠ね。」

”其の一：持ち合わせていい靈力を全て注ぎ籠めるべし”

春美「これは…鈴があれば、なんとか。」

”其の二：封印する妖怪を瀕死に追い込み、器の側に置くべし”

春美「あ…雪女とかは消し去ったから、封印できない。

でも…封印し直すから、現在進行系でされてるのは大丈夫よね？」

春美は独り言を言つていた。

”其の四：封印する妖怪の妖力を注ぎ籠む靈力と練り合わせながら、器に入れるべし”

春美「妖力を靈力と練り込む…？」

春美はいまいちよく分かつてなかつた。

”器の外側から内側に渦を描くように練り込むべし”

春美「外から…？あ、そつか。」

春美は理解した。

光輝「目当ての物は見つかつたか？」

光輝が気分良く春美のところにやつて來た。

春美「…うん。光輝くんは何を見つけたの？」

すると、光輝は腕を出した。

腕には、七色に光るブレスレットを着けていた。

光輝「綺麗だろ？」

春美「うん。」

2人は倉の外に出た。

春美は空を見上げた。

春美「…また、邪氣が強まつてゐる。」

光輝「ふうん。」

邪氣を感じない光輝は、どうでもよさそうだった。

春美「祠の封印が解けかかつてゐ！？早く封印をし直さなくちゃ…！」

光輝「封印をし直す…？」

春美「うん。行つてくる！」

光輝「今すぐか？もう夕方だぞ！…」

春美「解ける前に行かなきやーー！」

春美は走り出した。

光輝「春美！？」

光輝は追いかけた。

再封印！

春美は光輝と2人で桜ヶ丘小学校の祠、西の道に行つた。

すると西の首の祠は、ひびが入り、そのひびから忌々しい邪気がでていた。

光輝 何た？ 気持せ悪く！」

春美（靈力がなくて感じるのは？）

まだ封印は解けてないのに。

…封印されたモノかすこし邪氣を持てしてゐる？

そして、スイッチを切り替えた。

春美「今から祠の封印をし直すよ！」

春美はありつけの靈力を、祠からでている邪氣と練り合わせ、祠の外側から渦を描くように中心に押し込んだ。

ー グ グ グ グ グ グ グ グ グ

すると、祠から封印を阻止しようとする邪気が、怪しい音を発しながら外に出てきた。

看護（何）の強い印象…

春美の額に汗が流れた。

光輝 — 春美？

春美「…………」「めん、ちよつと黙つてて。集中しないと、中の奴に負
けをうながかひ。」

春美は口を閉じ、真っ直ぐに祠を見た。

光輝は春美の奮闘する後ろ姿をしつかりと見守った。

しかし、祠からでている邪氣はどんどん大きくなつていつた。

春美一：〈〉！！

春美は邪氣に押し出されそうになつたので、地面に膝をつき、踏ん

一
ズリ

だが、祠から押し出そうとする力に春美の踏ん張りは歯が立たず、春美の体は、地面にその跡を残して祠から遠くに下がられていった。

光輝一春美二！！

光輝は春美の背後にまわり

卷之三

春美は驚いて、彼を振り向きやうになつた。

中 し ろ ！

春美 · · · · ·

春美はどこで
光輝は心強い存在はなつた

春美の力は強くなつていつた。

「おやかしい…」

春美・光輝「！？」

祠から低く野太い声が聞こえた。

光輝「：今の声つて？」

春美「封印されてる奴よ！！」

すると、祠から大きな手がゆっくりと出てきた。

春美「封印が…破られていってる！」

手が出てくると、一層に邪氣も増した。

光輝「く…苦し…。」

光輝の力は弱まった。

春美「光輝くん！？」

光輝（くそつ…俺は何の役にもたてないのか…？…誰かの役にたちてえ！…）

—キラツ

すると、光輝の願いに反応したかのように、光輝の着けていた七色に光るブレスレットが、輝きだした。

春美（そのブレスレット、もしかして靈力が籠められたものなんじや…。）

春美は、さつき倉で見た巻物に思いあたるとこがあったので、思い出した。

「こいつ、生意気な…。」

ブレスレットの輝きは、光輝の体を守るだけじゃなく、春美にも力を与えた。

春美「力が…みなぎつてくるよー。」

光輝「ああ。」

春美「これならいける…
できるよ、封印！…」
そう思つた時だった。

「できると思つた…！」

小娘共つ！……

祠から今までにない、ものすごい邪気が放出された。
そして、祠から手だけでなく、腕までも出てきた。

春美「あ、キヤアアアツ！……」

光輝「うあつ！？」

そね膨大な邪気に、2人は追いやられ、校庭の隅にあつた祠から遠く離れた校舎まで飛ばされた。

一ピキッ…パキ、ボキ…

祠のひびが広がつた。

そして、祠から大きな頭が出てきた。

頭には、2本のいかつい角があり、真っ赤な長い髪が祠から出た瞬間に、風になびいた。

光輝「…鬼！？」

そう、出てきたのは巨大な鬼だった。

一バキーッ！！

鬼が祠から完全に出ると、祠は崩壊していった。

春美はがく然とした。

春美「…封印、しきれなかつた。」

春美の声は、絶望を示していた。

初めてのケンカ

春美と光輝は、鬼が完全に復活する前に、その場を逃れた。
2人は家に戻った。

涼介「おかえり。」

涼介が腕を組んで2人を迎えた。

春美「涼介くん…。」

春美は封印のことを説明しようとした。

涼介「部屋で春恵ちゃんが横になってるから、行ってあげて?」

春美「うん。」

春美は部屋に行つた。

春美が行くと、涼介は光輝を見た。

涼介「お前とは話がある。説明してもらおうか。」

光輝「ああ…。」

光輝は涼介に連れられて行つた。

鬼が出てきたことで、靈力の弱い乙葉・春恵・吉長たちは邪氣に負けて自分たちの部屋で、横になっていた。

春美は春恵のいる、2人の部屋に入った。

春美「春恵ちゃん!」

春美は横になつている春恵の側に駆け寄つた。

春恵「…春美ちゃん。どこに行つてたの?」

みんなで探したけど、見つからないから…心配した。

春美「心配かけてごめん。」

それと、ごめん…。」

春恵「何が?」

春美「西の首の封印、できなかつた。」

春恵は窓の外を見た。

春恵「じゃあ、ここの強い邪氣は封印されてた妖怪の……。」

春美「うん、鬼が出てきた。」

すると、春恵は起き上がつた。

春恵「そんな危険な場所に、1人で行つてたの？」

春美「ううん、光輝くんがついてきてくれた。」

春恵「違う。靈力があつたのは春美ちゃんだけ……？」

春美「あ、うん。そうだね。」

春恵「…。」

すると、春恵は黙りこんだ。

春美「春恵ちゃん？」

春恵「…そんな危険な場所に行くなら、せめて靈力のある人と…。」

春恵の声はだんだん小さくなつた。

春美「何？」

春恵「私にも…一応、弱いけど、何の役にもたたないかもしれないけど、靈力がある。」

春恵のいつもと違う様子に、春美は戸惑つた。

春美「何?どうしたの、春恵ちゃん。」

春恵「私、春美ちゃんのお姉ちゃんだよ?…生まれてきたのはほんのちよつとの差だけど。」

春美「何が言いたいの?」

春恵はその言葉に、込み上げていた想いが爆発した。

春恵「…だから私は、もつと頼つてほしいのっ!」

春美「は?」

春恵はその勢いで普段我慢してることを言つた。

春恵「いつもいつもいつも、

春美ちゃんは自分勝手すぎる!」

強い靈力があるからって、…独りで何でもできると思わないで…!」

春美「そんな、思つてなんか…」

春恵「…思つてゐるから、独りで行ひやうんでしょう？」

雪女のときも、悪靈のときも！」

春美「だつて、あれもそれも私にしかできない」とだから…」

春恵「ほら、自分勝手！」

雪女のときは、私も吉良くんもいたじやん。みんなで力を合わせれば、春美ちゃん1人に負担かけなくていいじやん。」

春美「でも…」

春恵「悪靈のときは涼介くんがいた。だけど、春美ちゃんは自分が
ら突き放して、独りで行つたんでしょ？」

春美「そんなつもり…」

春恵の勢いは止まらなかつた。

春恵「今回も、みんなで行けばよかつたのよー」
すると、今度は春美が怒つた。

春美「違うつ！…私はみんなを守りたいと思つたから…」

春恵「私だつて思つてる…！」

だけど、みんなも思つてる…！」

守られたいなんて思つてないつ…！」

春美と春恵の声は、どんどん大きくなつた。

春美「そんなことわかつてる…！」

春恵「わかつてないよ…！」

春恵はどうどう叫んだ。

そして、一度落ち着いて深呼吸した。

春恵「…春美ちゃんがそこまで石頭だと思つてなかつた。」

春美「私だつて…」

春恵「春美ちゃんの馬鹿！」

もう知らないつ…！」

そう言つと、春恵は立ち上がりて部屋から出でていつた。

春美「…春美ちゃんの馬鹿！」

春美は床を蹴つた。

封印で疲れきった春美は、春恵が部屋に戻つてくるのを待つていたが、いつのまにか眠つてしまつた。

春美は、夢を見ていた。

~~~~~「お母さん」

声が聞こえた。

春美（ん…、ijiは？）

春美の目の前には、大きく立派な宇宙家の門があつた。

春美（あれ？私、部屋にいたのに。）

「お母さん」

不思議に思つていると、後ろから小さな女の子を連れた母が、歩いてこちらにやつて来ていた。

春美（あ、お母さんっ

……！？）

春美は両手を口に当てた。

声が出せないのだ！

「ねえ、お母さん。このがおとまりするおひい？」

母「ええ。」

母と小さな女の子は、まるで親子のよつな会話をしていた。  
しかし春美には、この光景は微かに見覚えがあつた。

春美（…。）

春美は周りの景色をじつくりと覗渡した。

空は夜のはずだが、太陽が出て明るい。

周りの木々も、緑が目立ち、うるわしくセリが鳴いてるはずだが、葉は落ち、代わりに白い物が積もつていた。

春美（…。）

最後に、春美は小さな女の子を見た。

「お母さん！」

女の子は母と手をつなぎ、母が振り向くと、幸せそうに笑った。

春美（この子…私だ。）

それに気づいた時、家の中から今よりも若っこ葉が出てきた。

乙葉「長旅お疲れ

和葉、春美ちゃん。」

乙葉は確かに、女の子に”春美”と書つたのだ。

… そう、これは8年前

春美に靈力が目覚めて約1年が経つ頃だ。

母は手に持つていた、少し膨らんだ手提げを乙葉にわたした。

和葉「じゃあ、よろしくね。」

そう言つと、母は小さな春美の手の高さまでしゃがんだ。

和葉「いい子にしてるのよ？」

「うん！」

頭を撫でられ、春美は上機嫌だった。

和葉「じゃあ。」

乙葉「気をつけてね。」

和葉は春美を残し、待たせてあつたタクシーに乗つた。

「いつてらつしゃい」

小さな手を大きく振ると、母もタクシーの中から手を振り替えした。

春美（私、一度ここに來てた。）

小さな春美と乙葉が家の中に入つていいくので、春美もついていった。

「乙葉さん、誰ですか？」の子。」

廊下を歩いてると、小さな男の子が話しかけてきた。

乙葉「春美ちゃんよ。」

3日間、乙葉にお泊まつするのみ。仲良くしてあげてね。」

「はい。」

小さな男の子は、春美に手を差し出した。

「僕は涼介。」

「春美…。」

「あっちにおもちゃがあるから、あっちで遊ぼー!」

「うんっ」

小さな涼介は、小さな春美をリビングに連れて行った。

春美（あれが、涼介くん。

私と昔会つてた…。何でこんなこと、忘れてたんだろう?…）

一チラ…

春美（！？）

リビングに連れていかれる一瞬、小さな春美と春美は目があつた。  
だが、小さな春美はすぐに前を向いて何事もなかつた様に、涼介と  
行つた。

春美（びっくりしたあ…。

でも、確かに目が……）

一ぱっ!!

その瞬間、周りの景色が一変した。  
春美は、どこかの山の中にいた。

## 記憶（2）

春美（「じいやはどじーへ」）

春美は慌てて周りを見渡したが、見たことのない場所だった。  
「じいやは裏山です。」

春美（「！？」）

どこからか声が聞こえた。

声の方には、小さな春美がいた。

春美（私が見えてるの？）

「はい、ずつと…」

春美は声が出せないので、小さな春美には言いたい事が伝わってい  
た。

「春美ちゃん？ じつちに来て！」

小さな涼介の声だ。

「はいっ」

小さな春美が涼介の方に行つたので、春美もついていった。

その先には、見たことのない祠があつた。

春美（あれ？ 知らない祠だ。）

祠は木々の奥の田立たない草影にひつそりとたたずんでいた。

「じいには宇宙葉嗣が最も苦戦した妖怪が2つ封印されてるんだっ  
て。」

小さな涼介は、舌足らずな口調で難しい言葉をしゃべつた。

「そらのはづぐ？」

小さな春美にはわからない単語だつた。

「うん、宇宙葉嗣。

じいの祠は”中の首”つて書いて、他の祠よりトクベツなんだつて。

「

「ふうん。」

春美には、説明されてない祠だった。

春美（…“中の首”の祠の話なんて、聞いてない。

宇宙葉嗣が最も苦戦した妖怪？

一体何が封印されてるんだろう。）

春美が興味津々だったのを、小さな春美は気づいていた。

「見てみる？」

小さな春美は祠に触りついと、手を伸ばした。

春美（！？）

その時春美には何かを感じたが、小さな涼介と春美は気づいてない様だった。

春美（…ダメ、触っちゃダメ！…）

「え？」

春美の想いは、小さな春美にちゃんと届いていたが、遅かった。

一ピト…

小さな春美の手は、祠に触れていた。

一シユル…

祠から邪気が少し出た。

「あ～？」

邪気は、小さな春美の体に巻き付いた。

一シユーン…！

「キヤー…！」

「春美ちゃんつ！」

邪気は、小さな春美を祠に吸い込んだ。そして、春美を助けようと

した小さな涼介も、祠に吸い込まれてしまった。

### 記憶（3）

小さな春美と涼介が祠に吸い込まれた後、また光景が変わった。

今度は、四方八方が真っ暗で、何も見えなかつた。

春美（…何が起こつたの？）

春美は理解できていなかつた。

春美（…き、気持ち悪い。）

春美は手で口をふさいだ。

周りの邪氣は、春美にも不快感をいだかせるほど強さで、吸い込むと人体に被害がでるレベルだつた。

春美（…これも記憶の続き？）

8年前にこんなこと、あつたつけ？

こんな暗闇の記憶は、春美にはなかつた。

—ソワツ…

春美（…？）

暗闇の奥から、微弱な靈力が流れてきた。

春美はその方向に向かつた。

だんだんと、靈力が強く感じてくると、春美には子供の泣き声が聞こえてきた。

春美（私…それとも涼介くん？）

春美はうずくまっている子供の姿が見えた。

それは、小さい春美だつた。

春美（大丈夫？）

春美は駆け寄つた。

「うわあんつーー、いわいよおうーー！」

小さな春美の側には、涼介が倒れていた。

涼介も気絶する位の邪氣なのだ。

春美（大丈夫よ、泣かないで。）

春美は小さな春美を元気つけようと、頭をなでようとした。

が。

「スウ！？」

春美の手は、小さな春美には届かなかった。いや、触れることができなかつた。

春美（！？）

私は干渉してはいけないの…？）

春美は小さな春美を見た。

そして、優しい声で話しかけた。

春美（泣かないで、怖くないわ。

一緒にここからでもしょ？）

小さな春美は鼻をすすつて、うなづいた。

そして小さな春美が涼介を引きずつて、その空間を移動しまわつた。  
しかし、出口は見つからなかつた。

「…無駄だ。お前たちは完全に捕らえた。逃がさない。」

闇の中を低く「もつた声が響いた。

「誰！？」

小さな春美はビクッと肩を縮めた。春美はそれに気付き、小さな春美の前に立つた。

春美（私が、この子たちを守らなくちゃ…）

「いつもいつもいつも、

春美ちゃんは自分勝手すぎる！

強い靈力があるからって、… 独りで何でもできぬと思わないで…！

春美（！？）

春美の中に、春恵の言葉がよみがえった。

「キヤーーー！」

春美（！？）

小さな春美の悲鳴で、春美は我に返つた。

春美（どうしたの？）

すると、小さな春美は震えた手で、ある方を差した。

春美（！？）

その方を見ると、大きな黄色い目が2つ、じつとこちらを見ていた。

「～お前、喰らいがいのある靈力だなあ…。」

田はギロッとした小さな春美を見た。

春美（させないつ…）

春美は靈力を籠めようとしたが、靈力は集まらなかつた。

春美（…力が発動しない？

そんなつ、今必要なのに…）

暗闇から出てきた、鬼以上の大きな手が春美を通り抜けて、小さな春美を握りつぶそうとした。

「イヤーーー！」

一チリイーン…

その時、小さな春美の前にいきなり鈴が現れた。

春美（！？）

鈴は、靈力で結界を作り、大きな手が小さな春美に触れるのを防いだ。

## 記憶（4）

「！」、「」の靈力… 宇宙葉嗣か！？」

闇の中からは、驚きの声が聞こえた。

春美（！？）

そして”宇宙葉嗣”という単語に、春美も驚いた。

「当たりです。」

鈴から靈魂らしき塊が出てきて、実体化した。  
それは、白い召し物を身に纏つた男だった。

「な、何故貴様が…」

葉嗣「この子は、私の子孫の中でも最も強く輝ける期待の星、こんなところで死なすわけにはいくまい。」

春美（あれば、宇宙葉嗣？）

宇宙葉嗣の横顔は凜々しく、どこか涼介の面影があった。

「何故貴様、生きている？

封印から既に200年の月日は経つたはず！  
いくら貴様でも、人間。死んでいるはずだが…。」

葉嗣「僕は君の言つ通り、死んでいるよ。」

宇宙葉嗣は笑みを浮かべた。

「では何故…。」

大きな目は、葉嗣をじっくり観察した。

「…ふむ。大体理解したぞ、その鈴だな！！」

大きな手は鈴を指差した。

葉嗣「これはまた正解。

この鈴は、生前に、僕の靈力を籠めたものだからね。僕の魂が入るのは当然だろ？？」

「ふふ…ははは…！」

また会えるとは、嬉しいぞ…葉嗣よ。」

声は笑いだした。

「お前への怨み、当人にぶつけることができるとは……胸が高まる！」

葉嗣「私、怨まれるような事、しましたか？」  
すると声は一変し、怒った。

「たわけがつ…！」

200年前貴様は、代々続く我大天狗一族を滅ぼし、わしを封じた！」

葉嗣「それは、そちらが人里で暴れたからで…。

悪い事とは、思わないなあ。

ましてや、怨まれるなんて…。」

「何だと…？」

「…。」

一ギュッ！

その時、小さな春美は小さな手で、葉嗣の袖の端にしがみついた。

葉嗣「…大丈夫、春美。

私がついてるからな。」

葉嗣は、小さな春美を撫でた。

春美（あ…私、覚えてる。

誰かに頭を…）

春美は自分の頭を触った。

「今こそ貴様と貴様の一族を皆殺ししてくれる…！」

我大天狗一族のようにな。」

一ゾクツ

声が終わると共に、膨大な邪気に包まれた。

葉嗣「殺させはしない！」

一サラ…

葉嗣からは、心地よい靈力があふれでた。

そしてそれは、闇の中の大天狗を縛りつけ、さつきの祠に出る出口を造り出した。

葉嗣「さあ、先に出なさい。」

「うん。」

小さな春美は、涼介を引きずりながら、葉嗣が造った出口を通っていった。

その時、大天狗のかすれた声が聞こえた。

「待て、逃げる気か！？」

……覚えておけ！！

必ずしや、宇宙葉嗣と宇宙一族を滅ぼしてやる……」

怨みのこもった言葉だった。

小さな春美と涼介、葉嗣、そして春美の順に外へ出ると、葉嗣は祠の穴をふさいだ。

そして作業を終えると、小さな春美を見て、その高さまでしゃがんだ。

葉嗣「怖かつたな。でも、泣かなかつたのは偉いな！  
「…お姉ちゃんがいたし、あなたもいたから。」

葉嗣「”お姉ちゃん”？」

葉嗣には、春美の姿は見えていなかつた様だ。

葉嗣「……それより春美。

私のお願ひを聞いてくれるかな？」

「うん。」

小さな春美はうなづいた。

葉嗣「あと何年かしたら、私の封印は破られてしまう。  
だから、その時は春美…君が代わりに新たな封印を施して欲しい。」

「ふういん？」

葉嗣「ああ。封印しないと、さつきの天狗が出てきてしまつんだ。  
いや、天狗だけじゃない。

中の首には、天狗以外にも厄介なモノを封じている。  
封印が解けてしまつたら、大変な事になるからね…。」

そう言つと、葉嗣は小さな春美に、鈴を渡した。

「リイ…

葉嗣「これは、お守りだよ。

大事に持つていってくれ……」

「わかった！」

「…

葉嗣の体はだんだん透けていった。

葉嗣「ありがと……」

葉嗣は、最後まで言葉を述べる事なく消えていった。

春美は夢から覚めた。

春美「…私、どうしてこんな大事なことを忘れてしまっていたの？約束を、守らなくちゃ！」

春美は起き上がった。

「…

春美「…？」

「…みつ、

鬼の再来ー

春美的頭に、この声が響いた。

## 連れ去られた春恵

窓から外を見ると、もう真っ暗だつた。月さえ出でていない。

春美が眠つてゐる間に、時刻は〇時を回つていた。

起き上がつた春美は、みんなが集まるリビングに行つた。

涼介「あ、春美ちゃん。

夕方の事は光輝から聞いたよ。」

リビングに入ると、まず最初に涼介が話しかけてきた。

涼介「……でもね、そんな危険な事はもうしないでほしい。」

春美「……。

涼介「もつと、僕らを頼つて？

みんな、心配したんだから。

……約束だよ？」

春美「……はい。」

涼介は春恵と同じ事を言つたのがわかつた。

リビングの奥には、春恵がいた。一度春美を見たが、すぐに目をそらした。

春美（やつぱり、目も合わせてくれない……。）

春恵が頑固なのは、春美が一番よく知つてゐる事だ。また、春美も頑固なのを春恵はよく知つてゐる。お互ひに意地を張つて、謝るうつとしなかつた。

そこへ、乙葉があわてて來た。

乙葉「大変よ！小学校の方を見て！」

全員は、窓から外を見た。

「 「 …? 」 」

全員が見たもの…それは暗くてよくは見えなかつたが、小学校の屋上に陣取る鬼の姿だつた。

春美「あれば、さつきの…。」

光輝「ああ、さつきの鬼だ！」

乙葉「！？」

すると、乙葉は気づいた。

乙葉「何でこうちゃんにも鬼が見えるの？」

吉長「本当だ！」

光輝「えつと…」

光輝は返答に困つていた。

春美「…ブレスレット。」

その靈力の籠つている七色のブレスレットのお陰じやないのかな？」

光輝「ああ…そつか。」

光輝は袖をまくつて見せた。

涼介「これは…どこで？」

光輝「倉だよ。鍵は春美が開けた。」

乙葉「あの鍵を開けることができたの…？」

春美「はい。」

すると、春恵は話の環から出た。

春恵（また一人で…。）

春恵は怒つていた。

その後、話はすぐに鬼に戻つた。

涼介「どうする？春美ちゃん。」

春美「どうつて…もちろん、退治するに決まつてるよー放つておいたら、村が全壊しちやう…。」

涼介「だね。」涼介は微笑んだ。

涼介「じゃあ、鬼退治には僕と春美ちゃんは絶対行くとして…。」

涼介は乙葉・光輝・吉長・春恵を見た。

吉長「大丈夫だ。行ける！」

乙葉「私も……春恵ちゃんもだよね？」

春恵「う……うん。」

「俺も……」と光輝は言おうとしたが、涼介が即却下した。

涼介「だめだ！！光輝は残れ！」

光輝「まだ何も言ってねえよ！

つか、俺も行く！！何か役にたてるかもしんねえぞ……」

涼介「鬼が見えるだけで、役にたつとも思っているのか？」

涼介は腕を組んだ。

光輝「わかんねえじゃん！！」

涼介「いいから、光輝は家にいろ！わかつたな？」

光輝「う……。」

光輝は逆らえなかつた。

結局、鬼退治に行くのは、涼介・春美・春恵・吉長・乙葉に決まり、  
光輝は留守番になつた。

涼介「じゃあ、作戦を言つ！」

みんなはテーブルの周りに集まつた。

涼介「まず、僕と吉長くんと春恵ちゃんのチームが鬼に真っ正面からぶつかりに行く！」

その隙に、春美ちゃんと乙葉さんのチームが鬼の背後に回り込んで、前後から鬼に攻撃を入れる！そして鬼が弱つてきたら、春美ちゃんが鬼を封印する。……どうかな？」

春美「いいわよ。」

乙葉「私も。」

吉長「ああ。」

春恵「……。」

ただ、春恵だけは返事をしなかつた。

だが作戦は決まり、すぐに出発することになつた。

そして光輝を除く、涼介・春美・春恵・吉長・乙葉は家を出た。  
ただ、1人納得のいかない春恵は渋々、みんなの後をついて行った。

ードッ！！

春恵「つあ！？」

その時、春恵は誰かに殴られ気絶した。  
みんなからは、少し距離をおいて歩いていたので、春恵が殴られた  
事には誰も気づかなかつた。

ーズルズル…

そして春恵は誰かに引きずられ、どこかに連れていかれた。

## 鬼退治（1）

乙葉「あら、春恵ちゃんがいない……。」

最初に気づいたのは、乙葉だった。

涼介「本当だ……。」

4人は振り返った。

春美「まったく、勝手な行動して……。」

（春恵ちゃん、どこにいるの？）

春美は春恵に心で話しかけたが、返事はなかった。

春美「ま、いいわ。行きましょ！」

（構ってる余裕なんてないよ……。）

乙葉「そうね。」

そして、再び4人は歩き出した。

小学校が近くなると、邪気が強く感じた。

春美「涼介くん、作戦だけど……。」

春恵ちゃんがいなくて、そつちは大丈夫ですか？」

涼介「問題ないよ。」

春美「そ、よかつた……。」

小学校の前で、ふたてに別れた。

春美は、自分と乙葉の靈力が鬼に気づかれないように、小規模な結界を張った。

そして、小学校の壁沿いに体を擦るよひよひつづけて歩いた。

その頃、

家に留守中の光輝は、ただならぬ不安が込み上げていた。

光輝「やつぱ、俺も！』

光輝は歩き回っていたリビングをあとにして、家を走り出た。

そんな事を知らない涼介は、吉長と最後の確認をしていた。

涼介「…大丈夫ですか？」

吉長「ああ！」

涼介「危険だと感じたら、すぐに結界を張つて身を守るんだよ！」

吉長「わかっているさ！」

涼介「—よし！—」

2人は堂々と正門を通つて、運動場の真ん中に立つた。すると、上から鬼が降りてきた。

—ドスン！！

鬼が降りると、砂煙がたつた。

涼介「…！」

(でかいな…。)

2人は見上げた。

「何だ…さつきの小娘共じゃないのか。」

涼介「春美ちゃんと光輝の事か！？」

「名前など知らん。だが、戦いがいのある奴等だ。お前らで代わりになるのか？」

吉長「ばかにするなー！！」

吉長は武器の竹刀を構えて、鬼に討ちかかった。

竹刀には、靈力が籠められており、微粒子が細かく振動している。少しでも触れると怪我を負う代物だ。

—ザン！

吉長は、鬼の足元で竹刀を振るつた。

「ああ？」

鬼は切られた右足を見た。  
傷は、かすり傷程度だった。

「そんな物で…。なめられたものだ。」

鬼は片手で吉長を押し潰そうとした。

涼介「させるか！！」

涼介は走り出した。

涼介（滅殺術！！）

小さく呪文を唱えると、空気中に大きな刃が出現し、回転しながら鬼に向かつた。

一バシンッ！

鬼が吉長を押し潰そうとした片手は切断された。

「ぐあっ…。」

鬼は吹き出る血を押さえた。

乙葉「すー」-

いつの間にあんな物を出せるよつになつたのー…？

春美「違いますよ。

あれは実際に出したのではなく、幻覚です。」

涼介・吉長の勇姿を、2人は所定の位置について見ていた。

乙葉「うそっ！でも鬼は痛がってるよ？」「

春美「実際に鬼が攻撃を受けたのは、精神面です。」

（でも、それを続ける事ができるのは、相手が自分より下級の者のだけ…。そう長くは続かない。）

春美が予想した通り、鬼はすぐに立ち直った。

「つたく、びっくりさせやがって！」

鬼は、傷口から手を離した。

「「…？」」

傷口は既に塞がっていた。

春美（もひつ、もちそうこない…。）

春美はそう判断した。

春美「乙葉さん、行くわよーーー！」

乙葉「ええーー！」

2人は飛び出した。

「お前は少しはやるなあ。」

鬼は涼介を指差した。

「…だが、さつきの小娘共ほどじやない。」

涼介「なつーー？」

「さつあと出せー！」

小娘は…何処だあああーーー！」

鬼は空に向かつて叫んだ。

春美（乙葉さんは左に行つてくださいー。）

春美は乙葉に意思を送ると、乙葉は黙つて頷いた。  
そして、2人は別れた。

春美「私はここにいるわ！」

春美は走りながら、自分の結界を解いた。

「…そこにいたか。」

鬼は涼介と吉長を無視し、春美を見下ろした。

## 鬼退治（2）

「やつと出てきたな。

…さあ、さつきの続きをしよつー。」

鬼は笑つた。

春美「いいわよ！」

春美は立ち止まり、印を結んだ。

春美「上・天・下・地…」

するとそれに合わせるように、涼介が入つてきた。

涼介「左・在・右・無…」

そこに、乙葉も入つってきた。

乙葉「界・既・己・物・也…」

吉長は鬼が春美を見下ろしている時に、涼介から離れて、涼介と春美の直線上の丁度真ん中に立つていた。

吉長「貴・力・我・達・奪…」

そして4人は顔を見合せた。

「「「」」」、力を！…」

4人が一斉に叫ぶと、4人が立つてているところから白い線が出て、4人を繋いだ。

ースルルルル…

白い線は鬼まで伸び、鬼の邪氣を吸いとつた。

ードスン…

「な、何！？」

鬼は力が抜け、膝を地につけた。

「な…何をした…？」

涼介「これは宇宙家に代々伝わる秘術、邪氣祓い（じやきばらい）だ！」

乙葉「どう…もう動けないでしよう？」

乙葉は家に伝わる秘術に誇りをもつていた。  
それが故に、自信に満ちていた。  
だが、鬼は再び立ち上がった。

「この程度の攻撃で威張られるとは……舐められたものだ。」

もちろん、乙葉は驚いていた。

乙葉「そんな…どうして…？」

鬼は先程までの邪氣は出せなかつたが、全て吸い採られてはいない事を証明した。

鬼は左足を上げた。

乙葉「！？」

下には乙葉がいた。

春美「乙葉さん、危ない！…逃げて…！」

春美はとっさに叫んだ。

しかし、靈力のすくない乙葉は、さつきの秘術の反動で動けなかつた。

春美（いけないっ！…）

春美がそう判断する前には、体が勝手に走り出していた。

春美「あめえええ…！！！」

春美は乙葉の側にたどり着くまでに結界を張った。

一ドスン!!

鬼の重く大きな足が、降りてきた。

春美「くつ！」

乙葉「…春美ちゃん。」

春美は間に合ひ、鬼の足を見事に受け止めた。

春美（凄く重い…）

私だけじゃ、次はもたないっ！）

春美は乙葉を見た。

乙葉は振動で、腰を抜かしていた。

春美「立つて…逃げて…！」

そう言つたとき、鬼の第2撃の左足が降りてきた。

一ドスーン!!!

春美「つあ”…！」

さつきよりも強く重い振動が春美にかかつた。

結界は何とか衝撃に耐え、乙葉は無事だったが、春美は一瞬の大きな衝撃に耐えきれず、気を失ってしまった。

乙葉「春美ちゃん…！」

乙葉は春美の側まで這つて行つた。

「しぶとい奴め…」

鬼は再び足を上げた。

「これで留田だ…！」

鬼は足を降ろした。

「ドッスーン！！

一度目や2度目以上の規模の砂煙が運動場に立ち込めた。  
砂と風圧で、校舎のガラスはほぼ割れていた。

乙葉「つ…………あ、あれ？」

乙葉は鬼の足が降りてくる直前に、氣絶した春美を守るために、春美に覆いかぶさつたが、大きな音と風は来ても、痛みは来なかつた。不思議に思い、少しづつ目を開けて見てみると、目の前には2本の足があつた。

見上げると、それは……。

## 鬼退治（3）

乙葉「……り、涼介くん？」

「ゴク…

涼介は黙つて頷いた。

乙葉と春美を助けたのは涼介だった。

涼介は、黙つたまま鬼の足を受け止めていた。

「……んん？」

鬼は足の下を覗きこんだ。

春美「う…………ん？」

その時、春美は目を覚ました。

乙葉「あ、春美ちゃん！！」

春美「乙葉さん…それに、涼介くん。」

春美がその目で乙葉と涼介を確認した時だった。

「ザクッ！」

涼介「！？」

涼介の脇腹に、鬼の大きく尖り茶色がかつた爪が刺さった。

春美「涼介くん！！」

春美は目をまるくして叫んだ。

乙葉は何も言葉を発することができなかつた。

「シユツ…

涼介の体から爪が抜かれた。

「ドバッ！」

爪痕になつた、体に開いた穴からは、深紅の液体が、まるで川から溢れるかの様に流れ出た。

「パシャーンッ！」

やがて、涼介の体は、流れ出たその溜まりに倒れこんだ。

春美「り…涼…介く…ん？」

涼介からは、何の返事もなかつた。

春美は体中から血の気が引いたかの様に、真っ青な顔色になつた。頭の中は、真っ白だつた。

「…涼介…！」

沈黙の中”涼介”を呼ぶ声に、残つた3人は我にかえつて、涼介の死が現実であることを再度叩き付けられた。

声の主は、光輝だつた。

光輝「涼介！…おい、涼介…！」

光輝は涼介の元に駆け寄つた。

光輝「…涼介え…！」

光輝の必死の呼びかけに、ピクリと動かない涼介。春美は静かに立ち上がり、涼介の体を揺すつた。

春美「ねえ…ねえってば！」

だが、涼介が目覚めることはなかつた。

春美「そんなつ…」

春美は自分の手を見た。

手は涼介の血で真っ赤に染まっていた。

春美「い…いや…」

春美的手は震えた。

春美「いやあ…！」

春美的悲痛な叫びが響いた。

「なんだ、意外と呆気なかつたな。こんななんじや、暇潰しにもならない。」

優々と余裕の笑みを露に出す鬼。

全員の憎しみの矛先は、当然鬼に向いたが、誰も鬼に飛び込もうとはしなかつた。

皆、自分だけでは歯が立たない事・反撃に出ても、返り討ちにあうだけだ…と考えているのだ。  
……ただ1人を除いて。

「…面白くないぞ、

もつと楽しませろや…！」

しづれを切らした鬼が、また爪を立てた攻撃をして來た。

春美「…ゆる…さ…」

春美はスッと立ち、鬼を睨んだ。

「シユツ…

鬼の爪が春美に当たる瞬間！

春美「許さない…！」

春美的心に鈴が共鳴した。

ーリイン…

春美からも鈴からも、強力な靈力が放出して鬼の爪を受け止めた。

「その程度でつ！」

鬼はもう片方の手も爪を立てて、攻撃してきた。

ー シュウツ …

しかし、春美は簡単に受け止めた。

春美「… いらない。

お前なんか… いらない！

消えてしまえ！！」

春美から、今までとは違う靈力が出た。

ー シュウワ …

それは、受け止めていた爪を融かしていく。

「何！？」

春美「… 消えて、無くなれ！！」

春美の”融かす”靈力は鬼の全体にかかり、鬼の体は融けていつた。

ー シュウワ シュウワ シュウワ …

「な…こんなところで！」

鬼は完全に融けて消えた。

## 残ったモノ

鬼が融け消え、村を包む強大な邪気がなくなつた。だが、涼介を失つた哀しみは大きくなるばかりだつた。

### －ストン

春美は地面に落ちたボールの様に、膝をついた。

春美「…涼介くん…」

涼介を守りきれなかつたと、自分を責める春美。

光輝「…」

戦いに間に合わなかつたと、光輝は悔やんだ。

そんな2人に、乙葉は何も言わず、優しく抱き締めた。

吉長は、3人の元に静かに寄り添つていた。

みんな泣き叫ぶことはせず、ただ何も言わずに涙を流した。

そして段々夜は明け、朝日が差し込んできた。

乙葉「…取り敢えず、家に戻りましょ。力を沢山使つたでしょ？ 休んだ方がいいわ。」

乙葉は春美的肩を支えながら、立ち上がつた。  
残つた4人は、その場に背を向けて家にもどつた。

戻る途中、誰も言葉を発する事はなく、沈黙の中黙々と歩いた。

家に着くと、春美はよろめきながら部屋に向かつた。

春美「ただいま…」

部屋の戸を開けるといつもの癖でつい、そう言つてしまつた。  
部屋には誰もいなかつた。

春美（春恵ちゃん、まだ戻っていない。）

春美は、春恵の姿が見えないのを不思議に思ったが、今は何もしたくなかったので、そのままベッドに直行した。

—チユンチユン…チユン

小鳥のさえずりで田を覚ました春美は、まず春恵のベッドを見たが、ベッドは空で、帰つていた痕跡はなかった。

春美（帰つてきてない…。）

春美は着替えを持つて風呂場へと向かった。

朝シャンを終えてリビングに行くと、乙葉・吉長がいた。

乙葉「おはよ、春美ちゃん。」

春美「おはよひいざわいます…。」

吉長「…。」

みんなやはり、いつもとは違つた。精神的なダメージは相当なものだろつ。

そんな中、リビングに光輝が来た。

乙葉「おはよ、こうちやん。」

光輝「あ、あああ。」

光輝はコップに水を入れて飲んだ。

乙葉「あ…少し待つて、朝ごはんの準備はもうできてるから。」

乙葉はキッチンから、味噌汁の入ったお椀を食卓に並べた。

光輝「俺…いらない。」

今は、食べるとか気分じゃない。」

光輝はリビングから出ていこうとしたので、乙葉は呼び止めた。

乙葉「ダメよーちゃん食べなさい…。」

しかし、光輝は部屋に戻つていった。

乙葉「つたく～！」

…あ、そひ言えば春恵ちゃんは?  
まだ具合悪いのかなあ？？」

春美「え！？乙葉さんのところにいの？」

…私、てつきり乙葉さんのところにいると思つてた。

乙葉「ん！？いないよ。

…じゃあ、春恵ちゃんはどこにいるの？」

リビングに残つていた乙葉・吉長・春美は顔を見つめた。

吉長「俺は見てない。」

乙葉「私も。」

春美「…いつから？」

3人は目を見開いて、ハモつた。

「…昨日の鬼退治から…。」

そして、春恵の捜索が急きよ、始まつた。

## 消えた春恵の搜索（前書き）

はじめまして。

「鈴の音」を読んでいただき、ありがとうございます。

昨日ある指摘をいただき、今回から少し書き方を変えていこうと思います。

大きな変化ではありませんが、これから少しずつ変えていければいいなと思っています。

これからもよろしくお願いします

三（—）三

## 消えた春恵の搜索

3人は家中をくまなく探したが、昼を過ぎても姿は見つからなかつた。

その騒ぎに気づいた光輝は、ひょこっと部屋から顔を出した。

光輝「ん?何があつたの? ?」

その時、廊下には乙葉がいた。

乙葉「あ、こうちやん! ?

留守番中に春恵ちゃん見なかつた?」

光輝「……見てない。

春恵ちゃんがどうかしたのか?」

光輝は首を傾けた。

乙葉「それが…昨日の夜から姿が見えないの…」

光輝「えつ! ?」

光輝は驚いた。

乙葉「今、吉長と春美ちゃんの3人で探してるんだけど……どい

もいなのよ!」

光輝「…俺も探す!」

乙葉「ありがとう、助かる」

光輝は部屋から出た。

その頃、春美は倉の方に探しに来ていた。

春美「ああ、もうつ!

どこにいるの、春恵ちゃん! ! !」

春美は空に叫んだ。

- よつ

池の中の悪魔が放たれる -

その時、春美の頭にその言葉が響いた。

春美「何…？」

春美は頭の中で、今の言葉を繰り返した。

春美（池の中の悪魔が放たれる？

池の…？）

春美は倉と反対方向に向いた。

そこには、小さい池があつた。  
春美まさか

「…春美か？」

そこへ光輝がやつて來た。

春美「…光輝くん」

光輝は春美の声で、今日の前にいるのは春美だと判断した。

光輝「あ、やっぱ春美だつた…」

春美は首を傾けた。

春美「？」

光輝「あ、いや…。

2人つて後ろ姿だと、どっちがどっちだか解らないって言つか…」

光輝は苦笑いした。

春美「よく言われる」

春美は笑つた。

春美「…光輝くんも春恵ちゃんを探してくれてたんだね、ありがと  
う」「

頭を下げた。

光輝「いや、今はこうやって、何かに没頭する方が…何て言つか、  
気が楽なんだ。正直、助かってる」

光輝は池を眺めた。

春美「光輝くん…」

掛ける言葉がなかつた。

春美も池を眺めた。

2人は水面越しに田が合つと、直ぐに反らした。

光輝は落ち着いてはいたが、口を尖らせて倉の方を見た。

春美は逆に落ち着きなく、動搖しているようだつた。

2人はそれ以上喋らうとせず、沈黙が続いた。

そんな2人に、そつと水面下から近づいてくる者がいた。

その者は静かに池から頭を出した。

2人はそれに気づかなかつたので、その者は地上に這い上がつた。

ゾワッ！

春美「！？」

春美は背後から急に邪氣を感じ、振り返つた。

そこにいた者は、全身が深緑色で一足歩行をする腰の曲がつた物体

だつた。

春美「何者！？」

春美はその者から跳んで距離をとつた。

光輝「何！？…うわっ！！」

反応に遅れた光輝は、その者に両足を捕まれて、池に引きづり込まれた。

ジャバーン！

春美「光輝くん！」

春美は反射的に池に近づいてしまつた。

春美「あ…」

気づいた時にはもう遅く、春美も緑色の手に足を捕まれた。

春美「キヤー！」

ジャバーン！

そして、光輝と同様に池に引きづり込まれた。

春美（く……苦し……）

池の中では、息が続かなかつた。

春美「ぐはっ！」

春美は水を吸つてしまい、意識が遠退いていった。

霞ゆく視界の中で最後に見た物は、光る池の底だつた。

## 池の中の檻

ピシヤ…ピシヤ…

春美「う……ん?」

春美は水滴が落ちる音で目が覚めた。

冷たい石の床にうつ伏せで眠っていた。  
服は水で濡れてびしょびしそだつた。

春美「寒…」

春美は起き上がり、両腕を擦つた。

カシヤ…

春美「?」

足が自由に動かせなかつたので見ると、鎖のついた重そうな鉄の枷かせに繋がっていた。

春美がいた檻は真つ暗で、一面全てが石で覆われていて、鉄の格子  
が外に出るのを阻んでいた。

檻の外はランプ一つでうつすらと明るかつた。

とりあえず、今の状況を整理した。

春美（えっと…池の前で話してて…）

春美は顔を上げた。

春美「光輝くん！」

春美は格子から顔を出して、外を見た。  
必死で光輝を探した。

「う…」

隣の檻から、人の気配がした。

春美「光輝くん！？」

横を向いたが、隣の檻までは見えなかつた。

春美（見えないつ！

隣にいるかもしないのに…）

見えないもどかしさが焦りに変わつたのは、池の前で感じた邪気が、近づいてきている事に気づいた時だつた。

ゾワッ

春美（あの時の邪氣！！）

急いで頭を檻の中に引っ込めた。

そして、邪氣の感じる方を注視した。

そこには鉄の扉があつた。

ギイイイイイ…

鉄の扉がゆつくりと開かれた。

「ん…田を覚ましたか」

さつきの全身深緑色の物体が、言葉を発した。

春美「…あなたは何？」

春美の声からは、緊張が伝わつた。

「オイラ？ オイラは河童！」

河童の河助さかすけ！…

春美「河童…」

さつきの頭に響いた言葉が蘇つてきた。

・よつ

池の中の悪魔が放たれる -

春美「池の中の悪魔…」

河助「そー呼ぶ人間もいる！」

春美（…と言つことは、）いつがよつと田の封印されてた妖怪（）

春美は警戒した。

河助「ん？」

ここで河助は何かに気づいた様で、檻に顔を近づけて、檻の奥にいる春美をじっくり眺めた。

春美「な…何よ！？」

河助「…いやアンタ、前に捕まえた奴に似てるなあ」

春美「！？」

春美は直ぐにそれが春恵だと気づいた。

春美「その子、今どこにいるの！？」

河助「アンタには関係ないね」

簡単に教えてはくれなかつた。

春美は質問を変えた。

春美「じゃあ、私と一緒にいた男の子はどういへん？」

河助「ああ、そいつなら…」

河助は隣の檻に指差した。

春美

ジャラ…

春美は枷を見た。

春美「ちょっと、これ…はずしてよー。」

河助「駄目だ」

河助は即答だつた。

春美「何で？」

河助「アンタは靈力が強力だ！」

そんな危険人物を、ただ檻に入れとくのは、危険だ！」

もつともだ。

春美「つ…」

春美は目を細めた。

河助「まあ、気楽にしてろや

ちゃんと毎食は持つてきてやるからな」

河助はそう言って、また鉄の扉を開けて、出ていってしまった。

春美「ちょつとーー！」

春美は叫んだが、返事はなかつた。

## 脱出

春美「ちょっとーーー！」

広々とした牢獄はよく響いた。

春美「…なんちゃって」

春美は手に靈力を籠めて、足の枷に触れた。

パキンッ！

枷は容易に壊すことができた。

次に格子だ。

もう一度、手に靈力を籠め、連續する2本の格子を触った。

パキンッ…パキンッ

2本とも粉々になり、やっと体が通れる程の幅ができた。

春美はその幅をスムーズに通り、隣の檻を見た。

春美「光輝くん！」

光輝はまだ眠っていた。

春美はさつきと同様に、靈力で格子を壊し、中に入つて光輝に駆け寄つた。

春美「起きて、光輝くん！」

光輝「つ…」

檻の外からは気づかなかつたが、光輝の呼吸が粗かつた。

春美「？」

春美は光輝の額に手を当てた。

春美「…」

少し熱がつた。

春美「熱がある」

春美は光輝の腕を肩に掛けて、立ち上がった。

春美「つ…、やっぱキツイかな？」

だが、そんなことは言つてられない。春美は踏ん張り、一步…また一步と進んでいった。

重い鉄の扉を開けて、薄暗い牢獄から出た。

ギイイイイイ…

春美「つ！」

あまりにも外が眩しかつたので、目をしかめた。

外は普通の家の様な壁に、高い天井。そして左右に長く続く廊下だつた。

春美「どつちに行けば、出口があるので？」

春美は左右を交互に見た。

ゾクッ…

春美「！？」

左から邪氣を感じた。

春美（さつきの…河助？

今会うのは危険だ）

そう思い、右に進んだ。

しかし、進んだ方向からも邪気がした。

春美（河童は1体だけじゃないんだ…）

とにかく、敵に遭遇しない安全な所を探して進んだ。

ゾワツ…

前の方から邪氣を感じた。

春美（引き返すしか…）

春美は方向を変えて、戻ろうとした。

ゾワツ…

しかし、元来た方からも邪氣を感じた。  
両方とも春美たちの所に近づいてきていた。

春美（私一人なら何とかなるんだけど…）

春美はぐつたりして光輝を見た。

何とか隠れられる場所はないかと、辺りを探した。

春美（…………！）

少し行つた所に扉があつた。

春美（あそこに隠れよう！）

春美は急ぎ足で、その部屋の中に入った。

部屋は廊下より暗く、何があるか判らなかつた。  
だが今はここしかないので、春美は扉を閉めて、部屋の奥に行き、  
光輝を床に座らせ、扉の方向を向いた。  
そして、いつでも戦える体勢になつた。

ゾワツ…ゾワツ…

邪氣は扉の近くまで近づいてきていた。

春美「…」

春美の首筋に汗が流れた。  
心臓の鼓動も速くなつた。

そしてふたつの邪気が扉の前を通り、緊張の一瞬が近づいてきた。

春美「！？」

だがその時は、一瞬で終わった。

邪気は、扉の前をただ通り過ぎていった。

部屋の中を気にする様子は全くなかった。

春美「はあ……」

緊張が和らぎ、大きなため息をつくと、改めて部屋の中を見渡した。真つ暗な部屋の中を、手を頼りに散策した。

するとテーブルの上に、ランプがあるのが判った。

ランプの隣にはマッチがあつたので、それで火をつけた。

灯りのついたランプを持ち上げ、部屋を見渡した。

春美「……！」

部屋で見えたのは、衝撃的な物だつた。

部屋には天井まである棚が沢山あり、そこにはびっしりと小瓶や瓶が敷き詰められていた。

その瓶の中には、何かの液体に浸された人間の目玉や臓器が各々に入っていた。

またある棚には、人骨がきつちりと箱別けされていた。

春美「つ……」

吐き気をもよおす程の気持ち悪さに、春美の足元はふらついた。

春美「何……ここ」

他に言葉は出なかつた。

ガタン！

春美はテーブルにぶつかつた。

春美「……！」

そこで、目線はテーブルの上の書類に向いた。

## 脱出（2）

テーブルの上にあつた書類は、”人身売買書”と書かれてあつた。

春美「人身…売買！？」

ランプをテーブルに置き、書類をめくつた。

めぐると、顔写真・名前・性別・年齢の個人情報が記入されていて、その下には売られた体のパート名を記入する欄があつた。

春恵の名前が書かれてないことを祈りながら、必死でページをめくつた。

春美「……」

あるページで手が止まつた。

春美「そ…そんな」

落胆し、床に膝をついた。

そこに書かれていた事、  
そこに貼られていた写真、

それは紛れもなく春恵だつた。

ショックのあまり、売られたパートの欄を見てない春美。

ゾワッ…

その時、邪気が扉の前で止まつた。

そして扉は開かれた。

河助「…見つけたぞ！」

逃げるなんて、いけない子だ…お仕置きが必要だな

河助は刃物のように尖った爪を立てた。

春美「よくも春恵ちゃんを…」

今の春美は怒り狂っていた。

春美はテーブルの上にあつたナイフをすかさず手に取った。  
そして腰を低め、ナイフを田の前に構えた。

河助「そんな物で！」

河助が襲いかかつて來た。

スパン…

河助の爪は、避けた春美の腰まで伸びた長い髪を切った。

春美はショートヘアになり、切られた髪は床に散らばった。

春美「…！」

次は春美が動いた。

春美は堂々と正面から河助に向かつた。

シャキーン！！

ナイフと爪が重なり音を立てた。

河助「つ…」

河助は春美に圧され続けた。

そして息を呑む早さで振るつたナイフが、河助の爪を切断した。

河助「あああ！！」

そして氣を抜いた河助の背後に回り込み、河助の喉元にナイフを突き付けた。

春美「よくも春恵ちゃんを殺つてくれたわね！！許さないわ！！」

河助「ちょっと待て…う…待つた待つた待つたー！！！」

河助は必死で叫んだ。

春美「何を！人殺し…！」

それでも手を止めようとしない春美だったが、次の河助の言葉で止まつた。

河助「い、生きてる！」

春美「は？」

春美は止まつた。

河助「だから、生きてるって！！」

春美「春恵ちゃんが…」

そんなはずない！だつて書類に」

すると河助は書類を手に取り、春恵のページの売られたパーティの欄を春美に見せつけた。

春美「売られたパーティ…全身」

書類を読み上げ、河助から書類を引つたくつた。

春美「ど、どういう事なの！？」

本当に…春恵ちゃんが生きてるの？」

春美の声が高くなつた。

河助「ああ、その女は靈力があつたからな。丸々全身高く買い取つてもらつたよ」

すると、春美はもう一度ナイフを喉元に突き付けた。

河助「ひいっ！…」

河助は反射的に両手を挙げた。

春美「誰が買い取つたの？」

河助「それは…言えない。うちのお得意様だからな。」

春美「何？言わないと…どうなるか解つてるわよね？」

ナイフの先が首筋に突いた。

河助「ひいい！…」

首筋から緑色の血が流れた。

光輝「う…」

その時、光輝のうなされている声で春美的殺意は消えた。

春美「…まあ、いいわ」

春美はナイフを喉元から離した。

河助「つ…はあー」

解放された河助は、腰が抜けて床に座りこんだ。

春美「あなたの命、見逃してもいいわ。

ただし、私と光輝くんを無事に地上に帰してくれたらね」

ナイフはテーブルの上に置かず、ベルトに引っ掛けで腰に巻いた。

河助「わ、判つた」すぐに河助は立ち上がった。

春美は光輝の腕を再び肩にまわして、立ち上がった。

春美「出口に案内して！」

河助「ああ」

河助は扉を開けようとした。

春美「先に言つとくけど、

変な真似したらタダじゃ おかないから」

すると、河助は何も言わずに扉を開けた。

春美は光輝を支えながら、河助に案内された通りに進んだ。

河助「ここだ」

河助はある部屋の前で止まった。

春美「…中に、邪氣が2つある」

河助「いわゆる門番つてやつだ」

春美「そう…」

どうするべきか考えた。

そして考えた末、光輝を河助に託した。

春美「あなたを信用した訳じゃない。ただ、今は光輝くんをあなたに任せること」

河助「は？」

春美「今だけだから。変な真似したら…」

河助「解つたよ！」

河助は光輝を受けとると、光輝を肩に担いだ。

春美は一人でナイフを片手に、その部屋に入つていった。

春美は3分もしない内に扉を開けて、河助を中に入れた。

中の門番2体は、床に伸びていた。

河助「…アンタ、本当に強いな」

春美「まあね、光輝くんありがと」

春美はナイフを床に突き刺して、光輝を受けとった。

春美「で、どうしたら帰れるの?」

河助は天井を指差した。

春美「あ…あの光!」

天井は、一面光っていた。

その光は春美が池に引きづり込まれた時に、消えゆく意識の最後に見たモノだった。

河助「あの向こうは池の中だ。

オイラはこれ以上手を貸すわけにはいかない」

春美「解ってるわ、ここまでありがと」

そう言って回し蹴りを河助に喰らわした。

ドンッ！

河助は壁に頭を打ち、気絶した。

春美（さて、池の中という事は息がもつかどうか…）

天井を見上げた。

春美（結界を張れば、何とかなる…かな）

春美は光輝の回りだけ結界で包んだ。

そして結界を持ち上げて、光の中を通すと、春美は息を大きく吸つて、光の中を通った。

河助が言つた通り、光を抜けると池の中に出た。

春美は結界を泳いで持ち上げて、地上を手指した。

## 取引

春美「ん…」

目を覚ますと、そこには自分の部屋だった。

時計は、10時12分。

カーテンは閉まっていたが、明るかつたので今が朝であることは判つた。

春恵の搜索をしていたのは昼間だったので、それからどれぐらい経つたのかは予想がついた。

春美「…あれから丸一日」

起き上がり、ベッドに座つた。

その時、乙葉がやつて來た。

乙葉「入るわね」

ノックをして、部屋に入った。

春美「乙葉さん…」

何があつたのか聞こうとするが、先に乙葉が話始めた。

乙葉「驚いたわ！」

春恵ちゃんを探していたら、春美ちゃんといっちゃんの姿も見えなくなるんだから。

私と吉長くんは、家中探し回つたのよ…」

春美「すみません…」

申し訳なく謝つた。

乙葉「それで、何があつたの？」

乙葉は勉強机から椅子を引いてきて、春美が座つていたベッドの横で座つた。

・・・・・・・・・・・・・・

春美は長々と池の中で見たこと、あつたことを話した。

乙葉「……そう、だから池の前で倒れていたのね」  
黙つて聞いていた乙葉は、すぐに理解した。

春美は光輝が気がかりになつた。

春美「あ、光輝くんは！？」

乙葉「大丈夫、部屋で眠つているわ」  
すかさず聞いた。

春美「熱があつたみたいだつたけど……」

乙葉は春美を落ち着かせ、ゆっくりと話した。

乙葉「大丈夫よ、熱も下がつてゐる。春恵ちゃんがこうちやんを守つてくれたお陰よ」

それを聞くと安心したが、すぐに脳裏は春恵の事になつた。

春美「春恵ちゃん……」

乙葉「それが問題ね。

一体誰に売られたのかしら  
場の雰囲気が変わつた。

二人ともお手上げのようだ。

その時、春美は思い付いた。

春美「あ！」

急に発した声に、乙葉は驚いた。

乙葉「な、何！？」

春美「もう一度池の中に！」

意味が解らない乙葉に、続けて説明した。

春美「つまり、河童に協力してもらつて、春恵ちゃんを買い取つた所に乗り込むんです！！」

そのとんでもない発想に、乙葉は強く反対した。

乙葉「だめ！危険過ぎるわ！！」

春美も負けてなかつた。

春美「でも一番手っ取り早い方法です！！」

それでも乙葉は退けなかつた。

乙葉「ダメです！他に方法があるはず。時間がかかっても、別の方法を選ぶべきよ。」

だがここで諦めるほど、春美は物わかりのいい子ではない。前にもあつた通り頑固なのだ。

春美「じゃあ、乙葉さんは春恵ちゃんがどうなつてもいいんですか！？」

乙葉はとつとう、次の言葉を発してしまつた。

乙葉「あなたまで失うわけにはいかないのよ…」

返す言葉が出てこなかつた。

黙つてしまつた春美に、話を続けた。

乙葉「涼介に続いて春美ちゃんまであなつちやつたら、私は…残された私たちはどうしたらいいの！？」

目は涙で溢れていた。

涼介の事は、まだ誰も乗り越えられてない現実なのだ。既に反論はできなかつた。

黙つた春美に、乙葉は優しく声をかけた。

乙葉「…解つてほしい。

お願ひだから、自分から危険な事はしないで」  
眉間にシワが寄る。

乙葉「お願ひ…」

乙葉はそう呟いて、立ち上がつた。

そして背を向けた。

乙葉「…昼食の準備をしてくるわ。この話は後にしまじょう」  
部屋の外に出ると、振り返つた。

乙葉「大人しくしてね」

そう言って、キッチンに行つた。

だが、春美は大人する気など全くなかった。  
部屋からそつと抜け出して、池に行つた。

春美いつてきます

覚悟を決め、大きく息を吸うと池の中に飛び込んだ。

ザッパーん！

飛び込むと一気に底まで潜り、光の中を通つた。  
光の中を通ると、河助を蹴つた、あの部屋に出了。  
あの時いた門番の河童はいなかつた。

春美「はあ……はあ……はあ……」

床にはナイフが刺さつたままだったので、引き抜いて、またベルト  
に引っかけた。

ゾワツ……

邪気がこの部屋に近づいてきた。

春美（この邪気は……）

邪氣で個人の特定ができる。

キイイ……

扉が開いた。

「あ、アンタ……何しに！？」

河童は春美に気付き、驚いた。

春美「取引しましょ？」

春美はリラックスして話ができた。

## 取引（2）

ギイイ…

扉が開き、中に入ってきたのは河童の河助だった。

河助「やっぱリアンタか…」

春美が来ていたことを理解していったようだ。

それだけ、春美の靈力は強く特徴的なのだろう。

春美「元気そうね」

河助「ああ、お陰さまでな！」

今の言葉には、あの時に蹴られた恨みがこもっていた。  
しかし、春美は軽く受け流した。

河助「…アンタ、何しに戻ってきたんだ？」  
すると、春美は両手を組んだ。

春美「勿論、春恵ちゃんを助けに来たに決まってるでしょー…」  
河助は春恵が誰なのか、すぐに検討がついた。

河助「そんなの、無理だ！」

春美「やつてみないと判らないでしょ？」

春美は余裕の笑みを浮かべてみせた。

河助は目を点にした。

しばらく無言の時間が流れた。

その時間を止めたのは、河助の大きな笑い声だった。

河助「…ガ、ガハハハハハハツ」

春美は顔をしかめた。

河助「ハハツ…止めておけ。

アンタの強さは解っている。

だが、奴等に敵うはずがない！」

河助は笑つた後、真剣な表情・低い声になつた。

春美「…たつたあれだけの戦闘で、私を解つた氣でいるようね  
まるで、本気を出していないと言わんばかりの言葉だ。

河助「…もつと力を出せるのか?」

春美「やつてみせる!」

春美の意志は強く、真つ直ぐな瞳で河助を見た。

河助「…それで、俺は何を?」

春美「私を、春恵ちゃんを買つた奴の所に連れていつてほしい。  
それで、私を売つてくれればいい。」

春美は本気だ。

だが、河助は呆れた。

河助「本気か?」

春美「本気よ」

即答した。

春美「売つて儲けたモノは、自由に使っていい」

河助「ハハハッ!!」

また大きな声で笑つた。

河助「それでアンタは大丈夫なのか?」

春美は胸に手を当てた。

春美「大丈夫よ!」

私は強いからッ!!

河助の口角が上がつた。

河助「自信満々だな」

河助はじつと春美を見つめて考えた。

そして、結論を出した。

河助「…解つた。取引だな」

春美「そうよ、取引しましょ!」

2人は協同の証に握手した。

河助「じゃあ、ついてこい！」

河助はひょいと手招きして、扉を開けた。

春美「？」

春美は誘導されるがままに、ついていくと、別の部屋に入った。

春美「ここは？」

春美は部屋を見渡した。

河助「ここは色々な道具を保管してる倉庫だ」

そう言って、沢山段ボールが積んであるなかから一つを取りて中をあさつた。

そして手枷を取り出した。

春美「ん、手枷？」

手枷を受け取ると、首を傾げた。

河助「それをつける！」

春美「え！？ 何で？」

顔を上げた。

河助「乗り込むんだろう？」

……売り物として

春美「そつか…」

納得すると、すんなり手枷をつけた。

それを確認すると、河助は春美を肩に担いだ。

春美「うわっ！？え、ちょっと…！」

驚いて、ばたついた。

河助「…大人しくしろ！」

行くぞ、裏市場に！－

春美「裏市場？」

どうやつて？？」

ズン…

突然床に河助の足が沈みだした。

春美「！？」

目を丸くして下を見た。

河助「変に靈力使うなよ！」

次元を越えるんだ。

事故は起こしたくないだろ？」

河助は念を押した。

春美「解った」

春美は頷いた。

## あの壁…（前書き）

光輝の視点で書いてみました。

初めての事なので、読みにくかったりするかもしれません、どうかお付き合いください（。ー。）（。ー。）

あの時…

俺は池の前で春美と話していた。

「何者！？」

急に春美が後ろに飛び退いた。

ドッ！

その直後、俺は後頭部に激しい痛みを感じ、地面に倒れた。

最後に見えたものは、深緑色の何かだった。

~~~~~

次に目が覚めた時には、冷たい檻の中だった。

俺はうつ伏せで眠っていた。

服が濡れてる……寒い。

頭が痛い……ボオッとする。

こりゃあ、熱があるな。

体が重く、思い通りにならない。

瞼も開けるのが困難だ。

ふかふかのベッドが恋しくなるよ。

「光輝くん…」

誰かが俺を呼んでる。

涼介か……？

いや、これは……春美だ。

春美はつい最近うちに引っ越してきた双子だ。

あれ……？

春美と春恵、どっちが姉で妹だっけ？？

……まあ、どっちでもいいか。

それから、春美は強力な霊能力者だ。

涼介以上の。

そういうえば、涼介は何処にいるんだっけ？

今日はまだ見てないなあ。

……あ、そういうえば昨日……

まだ信じられない。

あんなに強い人だったのに。

俺は涼介を守れなかつた。

そりや、俺には靈力なんて洒落た力は持つてない。

無力だ。

何ができるだらう？

だが何かができたはずなんだ！

俺に…何ができるだらう？

そう考へてみると、微かに開いた瞼からうつすらと今いる檻の光景
が見えた。

誰かが俺を支えてくれている。

俺はしつかりとしない足取りで、牢獄から出た。

長い髪が見える。

春美もしくは春恵だ。

さつきの声は春美だつたな。

じゃあ、今俺を支えてくれているのも春美か。

あーあ、双子の見分けって難しいな。
そっくりすぎだ。

しばらくの間、春美が俺を支えながらの移動が続いた。

歩くの嫌だなあ…

ずっと寝ていたい。

そんな俺に歩く気力を与えたのは、隣にいた春美だけでなく、左手首にはめている七色のブレスレットだった。

力のない俺にも、「トイツ（ブレスレット）から力を与えられてるのが判つた。

宇宙葉嗣が力をくれている。

足は意志と関係なく、動き続けた。

だが、俺はある部屋で座らされた。

暗くて何も見えない部屋だつた。

春美が何かしている。

微かな明かりがついたのは判つたが、部屋の中に何があるのかは判らなかつた。

だが、何がある。

「そ……んな……」

春美の悲しい声が聞こえた。

何があつたんだろう?

目の前に悲しんでる奴がいるのに、また俺は何もできない…。

› 力チャ … <

その時扉が開いた。

「よくも… 春恵ちゃんを!」

春美の声が怒りに変わった。

そしてよくわからないが、激しい戦闘を始めた。

春美と…深緑色の物体?がチラチラと見える。

› シャキーン! <

鉄が擦りあう音が聞こえ、
2人?は止まつた。

「ちよつと待て…う…待つた待つた待つたー!」

直ぐに、春美のじやない声が命乞いをしていた。

…といふことは、春美が勝つたのか?

でも、誰かが死ぬの見るのはもう嫌だ。

特に春美には、誰の命も奪つて欲しくない…。

「う…」

これが俺の出せる精一杯の声だった。

・・・この後どうなつたのか。

正直な所、覚えていない。

たた、誰かに担かれたのを消えていく視界の中で見た。

次に目を覚ました時は、俺の部屋でベッドの中だった。

もとでこわたよ二たな

心が心かのへん上が最高だ

春の陣

卷之三

訪れた若長が、春美の起床を教えてくれた。

熱もないし
体が自由は動かせる…春美は礼を言ひは行けない

足取りは軽く、俺は部屋を出た。

そして、春美が居るであろう部屋の前で止まつた。

۷۰۰ ترکیبیات

•
•
•
•
•

ノックをしたが、返事がない。

また眠ってしまったのだろうか？

気になつた俺は、ドアノブを回した。

「俺：光輝だ。いるのか？」

入るぞ、春美」

だがなかに入つてみると、部屋はもぬけの殻だつた。

春美がいない…

トイレか？

そう思い、一階に降りたとき、池の方から音が聞こえた。

♪ザツパーン！♪

「！？」

池に飛び込む音だ！

急いで池まで行つたが、誰もいなかつた。

俺も行こうか…

池を眺めて思つた。

だが、その一歩は踏み出せなかつた。

……俺に、何ができる？

その時の俺には、大切な人を失う恐怖だけがあつた。

あ、俺にとって春美は失いたくない、大切な人なのか……

その時初めて俺自身の気持ちが判つた。

裏市場

河童の河介に担がれ、次元を越えて裏市場にやつて来た春美。裏市場は薄暗い空間で行われていたが、広く色んな店が並んでいてにぎやかで、色んな生物で溢れかえっていた。

春美「ふーん、けつこうにぎやかなのね。”裏市場”と聞いて、もつと静かで素つ氣ないイメージをしていたの」

担がれながらも、見たことのない生物や売り物を観察していた。

河介「そうか？」

人間の想像力はちっぽけだなあ」

河介は笑つた。

だが河介には見向きもせず、辺りを見た。

春美「あ、あれ何？」

手枷で両手が繋がっているので、両手でモノを差した。

河介「ん？」

河介はその方向の店に寄つた。

「へい、いらっしゃい！」

安い・速い・新鮮がモットーの”食品屋PINNBE”だよ！-

河童のアンちゃんには、主食の生肝を安くしてやるよつ見る、この艶やかな血色の新鮮な肝を！匂えばヨダレが垂れてくること間違ひなし！-」

活氣ある、よくわからない生物のおじさんだ。

河介「美味そうだな…」

河介は顎に手を当てて考えた。

春美「おじさん、それは？」

横から春美が聞いた。

「これはリニチミコ力族の祝いの席で出される高級食品だよ

春美（リーチ…んん？）

「エルボを主食とするトーハの肉を…一個買つかい？」

春美「いらない」

「だろうね。見たところ、君は客とこいつより商品だらうへ。」

おじさんの目は手枷に向いていた。

河介「ああ！人間の靈能力者だ。

捕まえるのに苦労したよ」

河介は春美を叩きながら話を呟わせた。

「ハハハ、お互い様だな。

レアなモノは手に入りにくいのだ。…それで、生肝買つかい？
同業者のよしみで、もつと安くしてやるよ！」

おじさんのウインク攻撃がきた。

河介「…そうだな、後でまた寄るよー。」

するとおじさんは生肝を手に取った。

「そんじゃあ、予約品として取つとくよー。その商品、高く売れると
いいな」

親切なおじさんだ。

「うちも繁盛するつてもんよー。」

… 親切？ なおじさんだ。

河介「ハハハ！」

河介は笑いながら手を振り、店を後にした。

春美「世界つて広いね。

聞いたことのない言葉ばっかり」

辺りを見渡しながら、ボソッと口に出した。

河介「人間は、次元を越える力はないからなあ」

河介も辺りを見渡した。

その後も春美は他にも珍しいモノを見つけては両手で差して、河介や店の者に説明をしてもらつた。

しばらく歩いていると、河介は一人で話始めた。

河介「オイラたち河童は最近まで宇宙葉嗣に封印されてたから、封印が解けた後ここに来るのは一回目だ。

200年前、突然宇宙葉嗣に封印された。

悪さをするやつもいたが、穏やかに暮らしをたてていたやつもいた。人間と共に存してやつもいた。

河童は人間と共に存して方だった。

だが、突然の封印…。恨んだね、人間を…」

春美は黙つて聞いていた。

河介「河童は1年に1人の生け贋を裏市場で売つて、生計をたてていた。それが人間との取り決めみたいなモノだつたんだ。」

春美（雪女も同じような事を言つてた）

春美はさつきまでとは違い、急に大人しくなつた。

春美「…宇宙家に引つ越ししてから色んな妖怪を滅してきたけど、雪女や河童の話を聞いて、よく判らなくなつてきたよ」

春美は胸に下げる鈴を握つた。

河介「…雪女も河童と同じで、穏やかに暮らしをたてていたやつがほとんどだつたはずだ」

春美は頷いた。

春美「…雪女に聞いた。

何かさ、悪いのは人間みたいだ。人間の都合で妖怪を封印してさ。何か、悪いね」

春美は下を向いた。

河介「…アンタみたいな人間がいたら、また共存できるのかもな」その言葉に春美は反応した。

春美「ダメだよ、生け贋なんて許せない。生け贋なしに、共存できないの？」

河介は黙つた。

裏市場（2）

河介に抱がれて、裏市場につれてこられた春美。

河介はある店に寄つた。

春美「？」

こじんまりとした店で、店先には何も商品を置いていなかつた。

「いらっしゃい」

帽子を深く被る、おそらく年配位の男性が話し掛けってきた。

河介は声を小さくして、春美を叩いた。

河介「例の物だ。」

すると年配の男性は意味が通じたのか、何も言わずに店の奥に河介を通した。

春美「…河介、ここって？」

河介「黙つてろ。」

もう奴等の敷地に入つてるんだ」

春美（奴ら：？）

疑問を残しながら、春美は人身売買の現場に見事潜入できたのだ。

「おや、あなたは河童の河介ではありませんか」

ランプを持った青い肌の人似た生物が、河介を見て近づいてきた。

河介「おう」

軽く挨拶をして、青い肌の人近づいた。

「どうなさつたんですか？」

先日に来たばかりではありませんか」

河介「いや、予定外なんだが、

アンタの欲しがる物が手に入つたんでな」

河介は上手い口調で話を進めた。

河介「こいつは前に売ったやつよりも強力な靈力の持ち主だ。」

「ほう…」

青い肌の人は、春美に興味をもつたようだ。

河介「どうだい、

買つてくれるか？」

「そうだな…」

青い肌の人は春美を下見した。

そして紙とペンを出した。

「この位でどうだ？」

青い肌の人は紙に値段を書き、河介にだけ見せた。

河介「…だめだ。

その値段じゃ売れないな。

もつと高くできないのか？

捕まえるのに苦労したんだぞ！」

どうやら、河介は見せられた値段に不服のようだ。

「これ以上高く…か？」

青い肌の人は、持っていたペンで頭を搔いた。

河介「……必要なんだろ？

靈力のある人間が

河介は相手の顔に下から顔を近づけた。

貸した金を奪いにやつてくるヤクザのような脅しだ。

「…仕方ない。

いくらならいいんだ？」

青い肌の人は河介に紙とペンを渡した。

河介「ふむ…」

河介は紙に希望の値を書き、青い肌の人へ返した。

「…、こんなに！？」

驚きの値段に、青い肌の人は絶句した。

春美

春美からは値段のやり取りが見えないので、退屈していた。
「こんなにも出せんよ」

河介「なら…」

河介は値段を書き直した。

青い肌の人はそれを見ると頷いた。

「ん、これなら」

河介「交渉成立だ」

河介は春美を下ろし、青い肌の人に引き渡した。

春美「…」

春美は青い肌の人には恐る恐る近づいた。

「では金だ」

青い肌の人は金の入った包みを3袋渡した。

河介「まいど」

河介は受け取ると上機嫌にもと来た方へ戻つていった。

春美は青い肌の人に腕を捕まれた。

「行くぞ、来い！！」

青い肌の人に引っ張られ、春美は春恵が連れていかれたであろう世界に乗り込んだ。

春美は青い肌の人に連れられ、裏市場からまた次元を越えて、新たな世界に足を踏み入れた。

その世界には、草木・植物が一切なく、荒れ果てた土地だった。周囲は平野だが、家一軒も見当たらない、へんぴな場所だった。

春美「どこに行くの？」

情報を収集しようと話しかけたが、返事はなかつた。

春美「あなたは誰？」

しかし、返答はない。

春美「…私は春美。

あなたの名前は？」

・・・・・

ここまで話しかけても、返事はなかつた。

春美もどうにか、この青い肌の人を喋らせようと、意地になつてきていた。

春美「…なぜ、靈能力者が必要なの？」

春美「ちょっと、聞いてる？」

結局、青い肌の人は喋らなかつた。
無言の中、2人は歩き続けた。

春美「ねえ…あなた、

私と同じ顔で、私より髪が長い女の子知らない？」

春美は早急に話を進めようと、遠回しに話を聞いていく方法を

一変し、直球に話をした。

。

ピクッ！

青い肌の人は止まった。

春美「知つているのね！

教えて…私の双子の姉なの！！」

春美は青い肌の人の正面に立った。

「双子…姉…」

その時初めて青い肌の人が話した。

「…あなたが春恵さんの妹様なのでしょうか？」

青い肌の人は、春恵の事を知つてている様だ。

春美「そうよ。春恵ちゃんを、探しているの…」

すると青い肌の人の態度が急変し春美を敬うようになつた。
自由を奪っている手枷を壊し、深く頭を下げた。

「…数々の無礼、お許しを」

春美「え…」

春美は怖くなり、一步退いた。

「私はビスデと申します。

春恵さんの元にご案内しましょっ

ビスデと名乗つた青い肌の人は、進んでいた方向を変え、別の方に向に誘導した。

春美は急なビスデの対応についていけなかつた。

ビスデに手枷を壊された時から、固まっていた。

ビスデ「どう…なさいました？」

さあ、こちらへ」

手の先を別の方向に向けた。

春美「…ええ」

春美はビスデの誘導について行つた。

しばらく歩いていると、広大な岩場が見えてきた。

春美「え…ここは？」

ビスデ「この奥に、春恵様が
いらっしゃいます」

そう言って、ビスデは岩と岩の間に空いた、大人が1人入れるよつ
な穴を差した。

春美は恐る恐る、穴の中に入った。

春美（か…春恵ちゃん？）

心で春恵を呼んだ。

（え…？春美ちゃん？）

すると、春恵からの心の声が聞こえた。

春美「いる…春恵ちゃんだ！」

嬉しくなり、春美は走り出した。

走つて行くと、暗い穴の中に明るい光が見えてきた。

春美「春恵ちゃん！」

春美はそこに飛び込んだ。

春恵「春美ちゃん！」

春恵も立ち上がり、春美を受け止めた。

ギュウ…

2人は再開を喜び、抱き合つた。

そしてお互いの顔を見あつた時に、春恵は気づいた。

春恵「あれ…？」

どうしたの…？その髪…」

短くなつた髪を見て、まず春恵は驚いた。

春美「ああ…これは河童と戦つた時に切られちゃつた。」

春美は髪を触つた。

春恵「河童と…」

春恵は責任を感じていた。

春美「あ、でも…」

この世界に来るのに、河童には協力してもらつたの。

結構いい妖怪だつたよ」

春美は笑つた。

でも、少し恥ずかしそうにもしていた。

春美「変…かな？」

春恵は春美の髪を触つた。

春恵「ううん、似合つてる。

前よりもいいじゃん。

私も戻つたら真似しよ…」

春恵は笑つた。

その時、

春美は”春恵を連れ戻す”といつ本来の目的を思い出した。

春美「あ、そうだ！？」

春恵「？」

春美は春恵の両手を握つた。

春美「帰ろう、春恵ちゃん！」

涼介が亡くなつて、私だけじゃあ手に負えないの。

これからもつと強い封印されたモノが出てくるかもしれない……」

春恵「！？」

この時、春恵は初めて涼介の死を知った。

春恵「り、涼介くんが死んだ…？」

う、嘘でしょ？」

春美「いいえ」

春美は下を向いた。

春美「本当の…現実よ」

春美の声は震えていた。

春恵「そんな…」

春恵にとつて身近な人の死は初めてだった。

無言になつたこの空間を終わらしたのは、春美でも春恵でもない女
だった。

「悪いが、まだ春恵を帰させる訳にはいかん」
女は立ち上がりつて、春美の前に立つた。

天使族の天使と叫び山の魔王

「悪いが、まだ春恵を帰させる訳にはいかんな」

女は立ち上がり、春美の前に立つた。

春恵「ソフィーナ…」

春恵は隣にいた女をそう呼んだ。

ソフィーナと呼ばれたその女は、150と小さめの身長で、春美と春恵より頭ひとつ分小さい。

だが金色のウエーブがかかった髪は春恵の腰まで伸びている髪よりも長い。

愛らしい藍色の瞳に、真っ白なワンピースがよく似合っている。

春美「…誰？」

ソフィイ「私は天使、ソフィーナ。母からの命で魔王を倒しにきた！」

春美「天使…魔王？」

混乱する春美に、春恵は説明をした。

春恵「その方は天使族の長の娘、ソフィーナ。その長である母親に魔王を倒す命令を受け、

この世界にやつて來たらしい。

あ、天使族っていうのは私たちの世界とは違う世界の住民で、

魔王っていうのは今いるこの世界を支配してて、”叫び山”と呼ばれていてる山にいる王さまなんだ。

魔王は、ソフィーナの世界の住民を拉致しては、厳しい労働を強いらせているらしい

説明を終えると、春恵は春美を真っ直ぐに見た。

春恵「…私は魔王に届けられる

はずだつたんだけど、偶然にも

ソフィーーाに会つて助けてもらつたんだ。だから…私はソフィーーা

たちの役に立ちたい！

まだ帰るわけにはいかない！」

真つ直ぐな思いを春美に届けた。

春美「春恵ちゃん…」

春恵「それに魔王は私たち人間も同様に、拉致や人身売買をして集めた人に厳しい労働を強いらせている…」

春恵の声は段々低くなつていった。

春美「…………判つた。

私も協力するわ！帰るのは、これが解決してからね

春美は微笑んだ。

春恵「ありがと、春美ちゃん！」

春恵は再び抱きついた。

ソフィイ「我からも礼を言ひ。

ありがとう、助かる」

ソフィイーाは頭を下げた。

春美「春恵ちゃんを助けてもらつたお礼ですか？」

春美はソフィーーाに頭を上げさせた。

その時、入り口を開じて

歩いてきていたビスデが到着した。

ソフィイ「すまない、ビスデ」

ビスデ「いえ、ソフィーーा様の命令は絶対ですから。春恵様のお願いでもありましたし」

ビスデは頭を下げた。

春美「？」

春恵「ビスデさんに、

もし春美ちゃんが来たら連れてきてつて、お願ひしてたの」
すかさず春恵は説明した。

すると、ビスデは笑つた。

ビスデ「ですが、春恵さんに教えていただいていた春美さんの特徴と春美さんが違つたので、

話を聞かなければわかりませんでした。」

ビスデは春美の髪を見た。

春美「ああ…髪ね」

春美はまた髪を触つた。

春美「…ごめんなさい、

ビスデさん」

するとビスデの方が申し訳なさそうに、謝つた。

ビスデ「いえいえ！

私がしつかり顔を見ていればよかつたといふことです…」

「ソフィイーナ様…」

そこに、ビスデと同じ青い肌の人気がもうひとり、やつて來た。

ソフィイ「おお、デルダか。

「ご苦労であつた。…それで、城の方はどうであつたか？」

ソフィイーナの耳元に寄つて、デルダは報告をした。

春美「…誰？」

春美「あの人も仲間で、城の偵察が役目の中のデルダさん」

2人はデルダを見た。

すると、報告を終えたデルダも

春美と春恵を見た。

デルダ「…初めてまして、デルダと申します。春美さんですね？」

春美「はい」

デルダは手を出した。

デルダ「どうぞ、よろしく」

春美「よろしく」

2人は握手した。

デルダと春美の挨拶が終えると、ソフィーナが話始めた。

ソフィ「…皆、聞いてほしい。

デルダからの報告で、現在魔王は城を離れ、別世界へと足を運んでいる。今が仲間を助け出すのに

最大のチャンスだと、私は思う…どうだろ？

皆の意見が聞きたい

ソフィーナは、皆を見た。

春恵「行こうよ、みんな！」

春恵はソフィーナに賛成した。

春美「そうね、一番の難解の魔王がいないのは有利になると想ひ。

私は賛成」

春美ものつた。

ビスデとデルダはソフィーナの命令は絶対なので、

春美と春恵が賛成すれば、
もつそれは決定だった。

ソフィ「よし、行こう！

叫びの山に…」

ソフィーナは気合十分だった。

叫び山の城

春美たちは城が見えてくると、ふた手に別れた。

春恵とビスデは城の正面でおとり役を、春美とソフィーナとテルダは城内に侵入する役に別れた。

春恵「さて、始めましょうか？」

ビスデ「はい！」

2人は叫び山の城の正面で、仁王立ちした。

リイン…

その時春恵の腰で、あの鈴が揺れた。春美が春恵の安全のために、春恵に持たせていたのだった。

春恵「まずは門を壊そう！」

春恵は先に走り出した。

そして靈力を両手に溜めて、鋼鉄の門に突撃した。

ドカーンッ！

春恵が門に衝突すると、大きな衝突音と震動が発生した。しかし門は丈夫で、春恵が突撃した所だけへこんでいた。

春恵「…まだまだ、もう一度」

春恵が門を背に、距離を取ろうと下がった時だった。

ビスデ「春恵さん、危ない！」

門の上から薙刀を持った、ハエのような体の兵士が春恵に斬りかかった。

春恵「！？」

春恵はビスデの言葉を受け

振り返ると、目の前まで降りてきいたその兵士の、大きな丸く赤い目に自分の姿が写っているのが見えた。

兵士は薙刀を振り上げた。

その時、ビスデが兵士の背後に周り、兵士を槍で切りつけた。

「ぐあっ！」

兵士は春恵の目の前で、緑の血を噴いて、薙刀を振り上げた状態のまま倒れた。

ビスデ「油断してはいけません」

春恵「…はい、ありがとう」

2人は門の上を見上げた。

そこにはさつきの兵士と同じような生き物が、異常を察知して、沢山集まっていた。

春恵「うつわ…」

ウジャウジャと群れる兵士は、気持ち悪い以外何でもなかつた。

ビスデ「さあ、やりましょう」

春恵「…うん」

春恵はさつきの兵士の薙刀を取つた。

春恵「派手に暴れるよつ！」

押し寄せるウジャウジャな兵士たちに、2人は一斉に斬りかかつた。

その頃春美たちは、門での戦闘が始まつた頃に城内に侵入した。手薄になつた城は、動きやすすぎる位誰もいなかつた。

デルダ「こちらです！」

デルダの案内で、春美とソフィーナは進んだ。

目指すは、厳しい労働を強いらされている労働者が閉じ込められている牢屋だ。労働者の中には、天使や人間がいる。

春美たちは、そんな人々等を助けにやってきたのだ。

3人が廊下の突き当たりの角を走り曲がった時、行く手には、とかげのような尾がついた生物が2体いた。

シャキーン！

春美は腰に下げていたナイフを抜いて構えた。
デルダは槍を構えてソフィーナの前に立つた。

春美「この場は私に任せて！」

春美は1人で2体を相手に戦つた。

デルダはソフィーナが怪我をしないように護衛した。

シユツ…シユツ…

春美は1体の腕を切り落とした。

「痛い痛い痛い痛い！！」

最初は効いているかのように見えたが、痛がっていたのは初めだけ
だった。

切断された所からは、新しい腕が生えたのだ！

春美「すごい再生能力…」

春美は目を丸くして驚いた。

春美は下がった。

「あー痛かった…」

とかげのような尾がついた生物は爪を立てて、長い舌を出した。

春美「キモ…さつさと消えて！」

ナイフを構えてもう一度その生物に向かつて走り出した。

「クオオオ…！」

その生物も雄叫びをあげて、春美に向かつて走り出した。

シャキーン！

ナイフと爪が重なり火花が散った。

春美「く！」

真っ直ぐと入つてくる爪を、

ギリギリで避けながら、反撃のタイミングを狙つた。

シャーン…！

春美「！？」

別方向から、もう一体の生物の爪が入つてきた。

春美は結界を張つて受け止めた。

「やるなあ…」

春美「そんなんに褒められても…嬉しくないし」

ザン！

最初の一体の方の爪が、目を離した隙に振りかざされ、春美の右頬と右肩に五本の傷跡が刻み込まれた。

春美「痛…」

春美の目の色が変わった。

「何だその目。やうつてのか？」

「やつてみるや…！」

2体は挑発した。

サツー

「「え…？」」

挑発の直後、2体の間に風が流れた。そして目の前にいた春美は、2体の背後にいた。

「何が…あつた？」

そう言いながら、2体は倒れた。

バターン…

ソフィイ「…何をしたのだ？」

春美はナイフについた2体の血を振り払った。

春美「ナイフに靈力を…

しばらく再生できないようにしただけ。先に進みましょ？」

ソフィイ「そ、そうか」

デルダとソフィイは、倒れている2体の間を通つて先に進んだ。

3人は牢屋のある地下に進む階段を見つけ、降りていった。長く地下に続く螺旋の階段、その終わりはまだまだ先のようで、見えない。

春美「どこまでも続いてるみたいね」

ソフィイ「ああ…」

ピタッ…

その時春美が立ち止まつた。

ソフィイ「春美、どうかしたか？」

春美（今…何かが）

春美は胸を抑えた。

ソフィイ「春美？」

デルダ「春美さん？」

2人は春美を見た。

春美「…ううん、何でもない」

ソフィイ「そう。なら、行くぞ？」

再び3人は階段を降り始めた。

春美「うん」

春美は上を見た。

春美（今のは春恵ちゃん？

一瞬靈力に変化が…）

春恵の身に何かあつたかと思いつと心配でならないのだった。
だが、今の春美がやらねばならない事は捕らえられた人々の解放。
まずはそちらが最優先事項。

春恵の事は、祈るしかない。

春美はただ無事だけを願いながら、階段を降りていった。

階段に終わりが見えてきた。

周りが石で囲まれている広い空間だった。そこに、いくつもの牢屋
があつた。

明かりは壁にかかる3本のロウソクだけで、牢屋の中を照らす物
はなかつた。

ソフィイ「ここに我天使族の勇敢なる兵士はおらんか？」

私は長の娘、ソフィイー！」

ソフィイーは大きな声で話しかけた。

すると、ソフィイーという言葉に反応した天使族の者たちが、格子

の隙間から顔をだした。

「ソフィーナ様？」

「い、今確かにソフィーナ様の名が…」
すると、ソフィーナが微笑んだ。

ソフィ「我、ソフィーナは
ここにある。…デルダ！」

デルダ「は！」

デルダは格子に手を触れた。

ジュワ…

すると、デルダの触れた部分が溶けだした。

春美「すごい…溶けてる」

格子は完全に溶け落ち、中の人々が出れるようになつた。

ソフィ「デルダ、他の者も出してやってくれ」

デルダ「はい、かしこまりました」

デルダは別の格子を溶かしに行つた。

ソフィ「…大丈夫か？」

ソフィーナは中の人々に手をさしのべた。

「ソフィーナ様…」

中から天使族の人々が出てきた。

「おお、ソフィーナ様をこの目で見られる事ができるとは…」
出てきた人々は、ソフィーナに感謝の意を示した。

春美「…」

その時、ソフィーナの隣で春美は考え方をしていた。

春美（さつき、春恵ちゃんの靈力が揺らいだ？
…何があつたのかもしれない。

ここはもう大丈夫そうだし、
上に行つてみようかな…」

春美は上を見た。

ソフィー「…先程から、

どうしたのだ？そんなに春恵が気になるのか？？」

ソフィーナは春美の行動を気にかけていた。

春美「ちょっと…ね。

…私、先に上に行つてていい？」ソフィー「構わんが…」

ソフィーナは春美に微笑んだ。

ソフィー「気を付けるのだぞ！」

春美「はい」

春美は直ぐに階段を駆け上がりついた。

裏切り

春美は螺旋の階段を駆け上がり、城の廊下に出た。

廊下はやけに静かだつた。

春美「…怪しい。何故こんなに静かなの？」

春美は窓から外の様子を伺つた。

外も静かで、音ひとつしてなかつた。

春美「静かすぎる…」

春美は目を閉じて、遠くにいるであろう春恵の心に話しかけた。

春美（春恵ちゃん…？）

しかし、春恵からの返信はなかつた。

春美（何かあつたとしか…）

春美は春恵の靈力を感じとりつとしたが、感じとりうことができなかつた。

春美「…おかしい」

さらに集中し、纖細な力も感じ取つてみた。

ゾクッ！

春美「！？」

その時すごい妖力が、廊下を流れてきた。

春美「な、なんて迫力…こんなにすごい妖力、感じたの初めて」
集中して感じやすい体になつていたので、大きすぎる力に春美はよろめいた。

春美「行つてみよう！」

春恵ちゃんの靈力を感じられないのに関係があるかもしれない」

春美は靈力を感じる方を目指して歩きだした。

妖力を感じる所に近づいていくと足元がふらつき、壁にもたれかか

らないと立つことができなかつた。

春美「…ここだ」

春美はその部屋の扉を押し開けた。

扉の奥の部屋はかなり広く、テラスに繋がる大きなガラスの窓が何個もあり、外の闇が見える。

窓には真っ黒なカーテンが一部、掛かっている所もあつた。壁には趣味の悪そうな大きな絵が何枚もかかつっていた。

テーブルと暖炉もある。

暖炉の上には、枯れた薔薇の植木が置いてあつた。

ただでさえ気持ちが悪いのに、

この部屋には心休まる物が何一つなかつた。

ギイイ…

春美「！？」

部屋の中には他の部屋に繋がる扉があり、その扉が風で不気味な音をたてながら開いたり閉まつたりを繰り返していた。

春美はその部屋に入つた。

春美「！？」

その部屋の中には人影があつた。

春美はその部屋の光景を見て、息を呑んだ。

春美「つ…春恵ちゃん！」

部屋の中心に、縄でグルグルに縛られて氣絶している春恵がいた。

春美は直ぐに駆け寄つた。

春美「春恵ちゃん、春恵ちゃん！」

春恵「う…」

名前には反応したが、目を覚まさなかつた。

春美「一体何が…」

春美が春恵に気を取られていた時だつた。

ガチャン。

さつき入ってきた扉が閉められた。

春美が振り向くと、そこには

デルダとソフィーナが立っていた。だが、いつもと感じが違った。ソフィーナよりデルダの方が、どう見ても態度がでかいのだ。

春美「何、どういう事？」

ソフィーナさん…どうして…」

するとソフィーナは眉間にシワをよせた。

ソフィー「…裏切りに、あつたのだ」

ソフィーナの声には憎しみが込められていた。

春美「な…！」

ソフィー「こいつも…ビスデも…

魔王に寝返つた敵だ！！」

ソフィーナは目を閉じた。

「その通り」

部屋の反対側から声が聞こえ、

春美はその方を見た。

春美「！？」

そこには黒い衣服を身に纏う大男と、傍らにはビスデがいた。さつきから感じていた、

強力な妖力は大男からでていた。

春美「…何で？ビスデさんもデルダさんも…ソフィーナさんの味方だつたじゃないっ！」

すると大男は大きく口を開けて、笑いだした。

「ガハハハッ！」

ビスデ「ふん、私はソフィーナの味方ではない。

ソフィーナを見張るために送り込まれた使者、スペイと言つべきかビスデは笑みを浮かべた。

後ろでは、デルダも笑みを浮かべていた。

春美「そんな…」

春美は落胆した。

張っていた気が途切れ、

立てなくなり、床に膝をついた。

「残念だつたな」

春美は持っていたナイフを床に落とした。

春恵「う…ん」春恵が苦しみだした。

春美「…春恵に何をしたの！？」

春美は大男に叫んだ。

「なあに、眠つて貰つていいるだけだぞ！…今はな…」

春美「今は…？」

春美はその言葉に引っ掛かつた。

ビスデ「お前たちは、これから死ぬんですよ…。」

魔王様の手によって」

ビスデは笑つた。

ビスデ「喜びなさい！」

魔王様が直々に死を「えてくださるのですよ？」

これは一生に残る栄誉です！」

ソフィ「腐つたか、ビスデ！」

我の敵は魔王。栄誉などいらん」

ソフィーナは笑つた。

ビスデ「…そんな態度取れるのも今のうちですよ」

ビスデがそう言つと、デルダは春美に向かつてソフィーナを押した。

ソフィ「くつ…」

春美「ソフィーナさん！」

春美はソフィーナを受け止めた。

「今からこいつらの処刑を行う」

大男が大きなオノを取り出した。

毒

大男は大きなオノを振り上げた。

春美「つ！」

春美は急いで結界を張った。

ガーン…

オノは降り下ろされ、結界に食い込んだ。

春美「くつ…」

春美は震動で頭がぐらぐらした。だが、結界が崩壊しないように、
気を張り続けた。

「無駄だ！」

大男の力はどんどん強くなつていった。

春美「く…」

ソフィイ「春美…」

ソフィイーナも横から力を出して、春美の結界に力を注いだ。

「そんな力で……ふんっ！！」

大男の力がさらに強くなつた。

ピキ…

結界にヒビが入つた。

春美「つ…」

パキ…ピキ…

ヒビは広がつていった。

春美（やばい！）

春美は力を注いでいたソフィーナを押し倒した。

ソフィイ「なつ！」

ソフィーナの力がなくなり、ヒビは全体に広がった。

パ、パキ…パキーン！！

そして、結界は崩壊した。

結界が崩壊すると、大男のオノが春美の腕をかすめて、床に突き刺さった。

春美「くつ…」

ポタツ…ポタツ…

肩からは血が流れた。

春美「つ…」

春美は肩を押された。

ソフィイ「春美…」

ソフィーナは春美に駆け寄つた。

ドクン…

春美「…！」

春美は肩の痺れ以外にも、何かが体を蝕んでいたことに気がついた。

春美「な、何！？」

手が動かない！？」

ソフィイ「え！」

ソフィーナはオノを掠めた春美の肩を見た。

青く変色してきていた。

ソフィイ「…毒！？」

春美「…？」

ソフィー「しかも速効性が強い…」

すると大男はオノを持ち上げた。

「そうだ、よく解ったな。

このオノの先には、この世界で最も強力な毒を塗り込んである。これに触れたら最後、5分ももつまい。

ふふ、ガハハハッ！」

大男は優越感に浸つた。

ソフィー……じ、じゃあ春美は……

「死ぬ！間もなくな。

大男はオノを肩に乗せ、仁王立ちし、腰に手をおき、込み上げる快感三昧。

感を抱える」とはしなかった。

春美「…………死ぬ？」

春美「死ぬ？」
——こんな所で？

ハハ…い、嫌よ。まだ死ぬわけにはいかない…死ねない！」

しかし、死は目前まで迫ってい

ゴホッ ゴ、ゴホッ！

咳に混じって、血が吐き出された。

春美「嫌……嫌た、嫌！」

「これは決定事項だ！」

変える」とはできません。」

春美の恐怖が頂点に達した。

その時、

チリイン…

春恵の首に掛けていたはずの鈴が、春美の目の前に現れた。

春美「え…鈴！？」

春美は鈴を掴んだ。

フワッ！

鈴を掴むと、鈴から暖かいお日様の光と風が出て、春美を包んだ。

春美「…暖かい…」

春美は気持ちが落ち着き、目を閉じた。

ソフィー「！？」

ソフィーナは春美の側で、鈴の効力を見ていた。

鈴の光は春美の肩の傷を直していたのだ。

青く変色していた皮膚の色も、

元に戻った。

「何！？」

大男は驚き、目を見開いた。

春美「感じる…この力、宇宙葉嗣」

春美は目を開けた。

そして鈴を首に掛け、ナイフを再び持つた。

鈴の結界

春美はナイフを構えた。

「面白い！」

大男もオノを構えた。

春美「はあっ！！」

春美は大男に飛びかかつた。

「単純な攻撃は叩き潰す！」

大男はオノを横に振り払った。

ビュン！

オノが風を切る音が聞こえた。

「な…ど、どこに行つた！？」

大男はオノを振り払った時に、避けた春美を見失つた。

デルダ「魔王様、後ろです！」

「なぬ！？」

デルダの注意で振り替えると、

そこにはナイフを振り上げた春美がいた。

ザン！

ナイフを振り降ろした。

「ぐあっ！！」

ナイフは大男の背中を真っ直ぐ切つた。

大男はオノを床に落とした。

デルダ「貴様！」

デルダが春美に向かつてきた。

春美「！」

春美はデルダをかわしてビスデに向かつた。

ビスデ「な！！」

ビスデは槍を取りだし、春美を切りかかつた。

春美はビスデの攻撃を避け、

高く飛び上がり、右足のかかとを向けてビスデの肩に落とした。

ビスデ「くつ！」

ビスデは肩の骨を折られ、槍が持てなくなつた。

その隙に、春美は春恵を担ぎ上げソフィーナの手を引っ張つて
その部屋を脱け出した。

しかし、春美の体力は長くは続かなかつた。
直ぐに息が上がり、走るスピードが落ちた。

ソフィイ「春美、こっちだ！」

ソフィーナは春美を逆に引っ張り、鍵の掛かっていない部屋に入つ
た。

その部屋はさつきの部屋より広くはなかつたが、休むには十分だつ
た。

春美は部屋のソファーに、春恵を寝かした。

春美「私の靈力は奴等に気づかれてしまう。結界を張らないと！」

春美は鈴を取りだし、部屋を丸々結界で包み込んだ。

春美「はあ…」

春美は座りこんだ。

ソフィイ「…すまない」

春美「ソフィーナさんが

謝る事ではないよ」

春美は、2人を巻き込んだことに後悔をしているソフィーナの頭を
撫でた。

春美「ソフィーナさんは悪くない」

春美はソフィーナの手を握った。

ソフィー「……」

しかし、ソフィーナは顔を上げようとしなかった。

しばらく沈黙が続き、春美は疲れて眠ってしまった。

その時結界は、ソフィーナが維持していた。

春恵「ん…？」

春美が眠りにつき、

しばらくすると春恵が目覚めた。

春恵「あ…あれ？」

春恵は起き上がり、部屋の様子を伺つた。

床には春美が丸まつて眠つていた。

ソフィイ「起きたか、春恵」

ソフィーナは向かいのソファーに座つて、結界の基である鈴に力を注ぎ、結界を維持していた。

春恵「何してるので、ソフィーナ？」

春恵はソファーから降りて、春美をソファーに寝かした。

ソフィイ「予定通り事は進んでいる。今は春美を休ませているだけ」

春恵「結界を張つてるのね」

ソフィーナと春恵は意味深な言葉を交わした。

春美は眠つていたが、微かに2人の会話が聞こえていた。

春美（2人とも、

何をはなしているの？

これは…何の夢？）

春美は夢だと思っているようだ。

春恵「…ソフィーナ、結界を張る作業を代わるよ」

春恵は鈴を取ろうとした。

ソフィイ「いや、まだ休んでいていい。私は戦いでは何の役にもたた

ないから…」

ソフィーナは苦笑いした。

春恵「…じゃあ、もうちょっと休んでるね」

春恵はそう言って、春美の頭元に座った。

春恵「春美ちゃん…」

春恵は春美の頬を触った。

春恵「無理をせちゃって、『めん』

春美

春美は春美は夢でそう答えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1414x/>

鈴の音

2011年12月17日22時56分発行